

## エレン・オレスチエルネ——ある生の物語——

フランツィスカ・ツー・レーヴェントロー伯爵夫人

岡光一浩 訳

以下に掲載する日本語訳は、Franziska Gräfin zu Reventlow: Ellen Olesjeme. Eine Lebensgeschichte (Roman), Fischer Taschenbuch Verlag, S.13-233のうちの、第一部（十三頁から七十一頁まで）の拙訳である。この長編小説については、著者のレーヴェントローと知り合いだったリケのかなり長文のエッセイや手紙（一九〇四年一月二十一日付けルー・アンドレアス・サロメ宛）における指摘がよく知られているが、とりわけ訳者が拙訳を試みた理由のひとつには、この長編小説がリケの『マルテの手記』を書くきっかけであったというアンジエロスの説（J.F. Angelloz: Rilke, Mercure de France, Paris, 1952）に触発された点がある。しかしそれはともかくとして、今ここでは、このテキストの冒頭に掲載されている作品と作者についての「編者の前書き」の拙訳を紹介して、まずはこの拙訳の導入とすることにする。

（作品について）

フーズムの群長の娘であったフランツィスカ・ツー・レーヴェントローは、世紀転換期のミュンヘンにおけるボヘミアンたちの中でも、とりわけ光輝く中心的存在であった。処女長編小説『エレン・オレスチエルネ』（一九〇三年）において彼女は、フーズムの城館やリユーベックで過ごした自分自身の子供時代や青春時代のことを——軽く虚構化しながら——物語っている。この長編小説で語られるのは少女エレンの、両親との、とりわけ母親との緊張関係であり、アルテンブルク・マゲダレーナ自由貴族宗派別女学校において彼女になされた「教育」や、由緒ある貴族的伝統に対する彼女の戦い、「イプセン・

クラブ」でひそかに友人たちと一緒に読んだ現代文学の与えた自由というものの影響、両親の家からの彼女の逃亡、そして息子が生まれるまでのミュンヘンでの最初の数年のこと、である。ここには、作者の若い頃の友人であるエマヌエル・フェーリングに宛てた彼女の手紙と日記が、部分的にはほとんどそのままの形で織り込まれている。フランツィスカ・ツー・レーヴェントローはこの長編小説において、自分と自分の体験した世界について物語るとともに、女性の目から見た世紀転換期の生の感情と思考を明らかにしている。ギーゼラ・ブリンカー・ガブラーはこの長編小説についての後書きの中で次のように書いている。「へすべてを可能に、すべてを意のままにVと一人の少女は考え、画家としての自由な人生を夢み、自分というものを率直に吐露して若い恋人との愛や親密性を持続しようと試み、エロチックな冒険のもつ魅力と緊張を発見し、その陶酔が持続することを夢み、優しく保護されることに憧れるとともに、誰にも拘束されずに芸術に分かち難く関わる生を切望し、屈服や自己犠牲を必要とする愛を体験し、エロチックなものから距離を取って芸術に励み、生き生きとした充実や総合的な体験である母としての愛を体験する。この長編小説はこのように感情と性的な刺激や、古臭い願いと新しい願いとが織り成す多様な動きを描写し、それらを、自分のためにそう生きたいと望む一人の女性の欲求として提示している。しかしそれは、へ古い秩序Vの混乱を招き、その女性自身にとっても矛盾や苦痛をとまなう巻き添えを意味し、決して今日まで明白な解決を提示していない。」

(作者について)

フランツィスカ(ファニー)・ツー・レーヴェントロー伯爵夫人は一八七一年、フーズムの群長の五人の子供の二番目として生まれた。一八九二年に成人に達すると、彼女は厳格な両親のもとから逃走し、最初にヴァンツベックに、その後、絵画を学ぶためにミュンヘンに行った。彼女はそこで世紀転換期のシュヴァーピング・ボヘミアンの中心的存在となった。彼女は特にルートヴィッヒ・クラージェスやライナー・マリーア・リルケ、カール・ヴォルフスケール、エーリッヒ・ミューザムらと親交を結び、小説や日記や手紙を書き、絵を描き、モデルの仕事をしたが、とりわけ(アナトール・フランスやモーパッ

サンなどの)翻訳の仕事でかろうじて財政的な生計をたてた。一八九一年に息子ロルフが生まれたが、彼女は決して父親の名を明かさなかった。フランツィスカ・ツィ・レーヴェントローは一九一八年にロカルノで死亡した。

フィッシャー文庫にはこの『エレン・オレスチエルネ』の他に、「日記一八九五—一九一〇」「日記一八九〇—一九一七」、ヘルムート・フリッツによる伝記「エロチックな反乱 フランツィスカ・ツィ・レーヴェントローの生涯」などの出版書がある。

## 第一部

ネフェルスフースの城館は横に伸びた側翼と、屋根とほとんど同じ高さの四角張った塔を持ち、大きな樹木の下に灰色に重々しそうに横たわっていた。しかしその高台からは、遠くの海や荒野を、そして堤防と緑の牧草地の間に長く伸びている小さな海辺の町を見下ろすことができた。

かなり昔、この城館は未亡人で評判の悪い、ある公爵夫人の館であったという話が残っており、この館の階上にある騎士の間の古い黒ずんだ油絵や、今も変わらず人々の口の上っている様々な幽霊話は、その時に生まれたもののものである。しかしその城館の領地は、もうすでにかなり以前から、オレスチエルネ家の所有となっており、油絵の中に描かれている厳めしい顔付きの女性たちは、違った時代の運命や動きを見下ろしてきたのだった。

秋の嵐が暖炉の間を擦り抜けて、不安を呼び起こす哀れな靈魂のような音を立てたり、霧が海から上って来て、すべてをその波打つ灰色のヴェールの中に包み込む頃になると、この古い城館はいつも、憂鬱で無気味な印象を人々に与えた。しかしこの城館には春も訪れたし、太陽がその高く広い空間からすべての陰鬱さを照らし出し、灰色な壁に囲まれた豊かな緑の庭に花を咲かせ、遙か向こうの海を青くきらきら輝かせる夏もあった。

ネフェルスフースの住民たちにとっては、この美しい季節も、冬と同じように静かに単調に過ぎて行った。この城館の領

主であるクリスチャン・オレスチエルネは、外に出掛けて野にいるか狩りに行っているかが多かったが、彼の妻は、台所や貯蔵室に用事のない時には、一番上の娘とブナの木の下石机のそばに腰を下ろしていた。このアンナ・ユリアーネ男爵夫人はがっしりとした体つきの美しい女性であり、黒ずんだよく動く目と強固な行動力を持ち——なにごともしちんと整えるために、朝早くから夜遅くまで立ち働いた。しかしそのような、命をすり減らすほどの彼女の仕事ぶりからしても、何事もすべてがうまく簡単いくわけでもなく、彼女の前には、決して先の見えない山のように、いろいろな事柄が立ち塞がっていたのだった。——家計の切り盛り、すこぶるたくさん家事、子供たち、その他、毎日行い、そして熟考し、絶えず頭を離れないたくさんの事柄。しかし、長女が大きくなると、彼女は少なくとも、母親が午前中に庭に腰を下ろして下着を繕ったり、煮詰めるための果物の皮を剥いたりしている時、いろんなことを話したり相談したりできる相手となった。

干し草は、雨に当たって、昨年のようにすべてが台なしになる前に、海辺の牧草地から取り込まなければならなかった。この春の父親の怒りようといったらとてつもなく激しいものだったが、そんなことがまた起こってはならなかった。このネフェルスフースの環境は、どれだけ長い間、人々の気持ちを耐え続けさせるのか心配になるほどに、あらゆる点で好ましいとは言えなかった。「ねえ、ママ。」そんな時、マリアンネは落ち着いた口調で言った。「悩まないで。まだ刈り入れまでには時間があるわ。」

しかし、母にはずっと以前からまた別の思いもあった。マリアンネが新しい子守り女を信頼できると考えているだろうか、と母は思っていた。というのも母は、エレンとデートレフが最近とみに手に負えなくなってきた、今ではこの幼い二人のことはばかりを気に掛けねばならなかったからである。また、エーリックが学校でうまくいっているのかも彼女には心配だったし、カイは相変わらずなかなか元気になりそうもなかった。とりわけカイの健康のことは彼女の心から心配事であった。実際、心配事はいたるところ存在したのであり、心配という言葉を、この男爵夫人はしばしば使った。そしてそんな心配事に遭遇するといつも、彼女は心の奥底から深い溜め息をついたが、そんな時もまた突然のように、なにかしなければならぬ

用事を忘れていたのに気付いて、急いで家の中に入って用事を片付けてしまふのだった。

そんなことがあると時折、マリアンネは、母と同じように溜め息をつきながらも、母という人は自分自身も他の人々も落ち着かせない人だなあ、と心の中で思うのだった。母の休むことのないせわしなさには、ほとんどなにか人を消耗させるようなところがあった。彼女にとってつねに平静を保っておくことは、特になにかの行動を起こそうとしている時には、並大抵なことではなかった。使用人がなにか失敗をやらかしたり、子供たちが悪い成績を持って帰ったり、或いは幼い者たちがなにかろくでもないことをしでかしたりした時に、彼らがすべての和解や仲介のための庇護を求めにやってくるのは、いつもマリアンネのところだった。こんなふうだったからマリアンネは、嵐のような午前が過ぎて、母が昼食後、一冊の本を持って居間に引きこもると、大抵はほっとして安堵の吐息をつくのだった。マリアンネにとっては、父がちよっとした書き物をしているのを手助けしたり、父のお供をして領地を回ったりする時が、一日のうちで一番楽しい時だった。

幼い四人の兄弟姉妹たちも、家の中で午後の安らぎを十分に楽しむことができた。その時こそ、彼らは邪魔されずに禁止されている試みをなんでも可能な限りやっつけてのけることができたのだった。——向かい隣の家の年老いた庭師を訪ねて、そこでコーヒーをごちそうになったり、その庭師の長いパイプでタバコを吸ったり、また長い間、格子戸のところまで待っていた村の子供たちを領地の中へ入れて、彼らと一緒に堀に橋を架けたり舟を浮かべたりした。小守り女にまだしななければならぬ仕事があつて、彼女がその場にはいない場合でも、エーリックが一緒であれば、子供たちは監視もなく長い間、自分たちだけで遊ぶことができた。エレンはいつも、兄のエーリックに付きまとい、幼いデートレフの手を引っ張った。デートレフがたくさんの格子戸や困難な障害物を通して外に出なければならぬ時も、二人の兄姉は力を合わせてデートレフを助けたのだった。そんな時、エーリックが大声を出したり、エレンが不平を言ったりすると、デートレフは悲しそうな顔をした。

しかし夏の午後こうした楽しみは、もはや以前ほど曇りのないものではなくなった。というのも、エーリックは学校へ行くようになってから高慢になり、以前はいつも引き連れていく連れであったエレンを軽蔑し始め、大きな者たちの仲間へ

加わるようになったからである。そのため彼女は多くのことを我慢しなければならなくなった。しかし時折、彼は思い立ったように、彼女に勉強を教えてやろうという気を起こし、そんな時、彼女は、彼の後について物語を読んだり、砂の上に文字を書いたりしたのだったが、彼女が無気力な感情を見せて、それを嫌がったりすると、彼はすぐにも彼女の尻をたたいたりひどく殴ったりした。そんな時、子守り女のリーゼが時折、中に割って入り、彼女を助けるのだった。

「エレンをぶたないで、一体、彼女があなたになにをしたと言うの。」

「おまえなんかが入ってくるなよ」とエーリックは見下したように言った。「ママはいつもエレンを非常に厳しくしつけているのだ。ママがいない時には、僕がエレンをぶたなければならぬのだ。自惚れて反抗しないようにさ。」

子守り女のリーゼは総じて、一日のうちでこのエーリックがいない時、非常に楽しげだった。彼が学校へ行っている時、彼女はよく、背の高いブロンドの髪をした召使いのオーヴェ・イエンゼンの働いている、庭の向こうの柵で囲まれた誰もいない牧草地へ小さいエレンとデートレフを連れて行った。そんな時、誰もがとても楽しげだった。オーヴェは自分の仕事を放り出して、リーゼと一緒にゆつくりと草の生い茂った広い道を歩き、その後を二人の子供は手を繋いで危なっかしい足取りでついて行った。時折、オーヴェは友人を連れて来ることもあったが、最初の頃、リーゼはそのことがひどく気に入らなかった。というのも、この友人のクラウス・ゼーレンスはこの辺りで噂になっていた泥棒であり、つい先頃、刑務所から出てきたばかりだった。しかし次第にリーゼにも、この男と一緒に来るのがオーヴェにとって都合の良いことであることが分かってきた。そんな時、彼女は誰にも邪魔されず、オーヴェと二人で草むらに横たわり、小さな子供たちのことをすっかり忘れてしまうことができたのだった。デートレフはきれいで穏やかな場所に行つて、そこで眠ったり、太陽の光を浴びながら足をばたばた動かしたりして遊んだ。刑務所を出たばかりのクラウスとエレンと一緒に遊んだ。彼女は彼がとても気に入る、彼と一緒に駆けずり回ってくれたり、花や野いちごを摘んでくれたりすると、彼女はことのほか幸せだった。そのことについては他人に話さないようにと言われていたので、彼女は誰にも話さなかった。子守り女のリーゼや彼女の友だち

のところにいる方が、家にいるよりエレンにはずっと楽しかった。というのも、ママと、ぶたれることとは、彼女の意識が捉えた、彼女の中でひとつに重なるほぼ最初の概念だったからである。

幼いエレンはすでに早い頃から、自分がこの世に生まれて来たのは間違이었다という暗い感情を持っていた。彼女は少々弱々しくて発育が遅れ、内気がかつ反抗的な子供だった。そのために、家の誰も彼女に特別な喜びを感じなかったし、二人の男の子に挟まれていたので、とりわけちやほやされることもなかった。実際、彼女は必要のない子供のように、絶えずあちこちに追いやられた。エーリックが連れであって欲しいと望む時には、彼女は彼と一緒に近所の子供たちや、やって来た者たちの中に加わったが、彼が彼女と関わりないことをしようものなら、彼女はまた、子供部屋に引き込んでしまわねばならなかった。エーリックが彼女を必要としたのは、彼女が意志のない彼の道具であり、こたまである場合だけであり、彼女が彼のために木を植える穴を掘ったり、彼のためにボールを拾ったり、或いは、ただその場に突っ立って彼の行為を賛美したりする場合においてだけのことだった。しかし次第に、彼女は自分自身を主張し始め、エーリックに対して頑固で無愛想になり、次第に弟のデートレフとのみ関わるようになった。しかし結局、彼女の立場は以前に増して悪いものになった。というのも、エーリックは以前から甘やかされ、可愛がられ、末っ子の金髪のデートレフも家の者すべてから熱愛され、彼女は完全に目立たない存在になってしまったからである。そのうえさらに、彼女はもう大きくなったということで、一緒にしでかした悪さのすべてに対して責任をもたなければならぬと言われるようになった。

エレンは次第に、そのすべての原因は自分が女であるためだ、という結論を持つようになった。彼女は何度も、幼い女の子はそんなに荒っぽくしてはならないとか、木に登ってはいけなとか、服を大切にしなければならぬ——実際、彼女は食事の際に着ることになっていて、いつもすぐに引き裂いたり汚したりしてしまふピンクや白の服が腹立たしくなるほど嫌いだ——といったことを聞かされるようになった。そんな時、時折、彼女は絶望的な気持ちになって、小守り女のリーゼに「どうして自分は男でないのだろうか」と悩みを吐くのがあった。それを聞いて、リーゼは彼女を慰め、「待つことよ、六

歳になるまではね。それから後になれば、あなたも男よ」と言った。

しかし六歳の誕生日を迎えた日、その日は彼女に最初の重い幻滅をもたらした。目が覚めと、彼女はエーリックの服を着ようとした。今や自分も男であり、甘やかされ可愛がられると思った。しかし彼女はひどく嘲笑され、父もまた、みんなと一緒に笑ったのだった。彼女は、自分は相変わらず女のままだということを改めて知り、誕生日にもはやなにも楽しむことなどできなかった。

その代わり、彼女は六歳になって、文字を覚えることを強いられるようになった。緑の庭椅子に腰を下ろしたママのそばで、彼女は決して覚えることなどできそうにない、ぞっとするような文字を目の前にして、じっと座り続けていなければならなかった。

ブナの木々がちょうど緑になり始める頃だった。空からはミツバチのブンブン鳴く音や夏を告げる鳥たちの囀りがしきりに聞こえてきた。エレンはそれらが気になり、文字を覚えることなど思いのほどには進まなかった。向こうではデートレフが大きな白い盛り砂をスコップで掬って遊んでいた。彼女はそこに行きたくて、いつもデートレフの方を横目づかいに見ていたが、母は決して彼女から目を離さなかった。母が縫い物をしたり果物の皮を剥いたりしている間、エレンは実際に、高熱に浮かされたように文字を一語一語たどたどしく追っついていかねばならなかった。そして、その文字の勉強はほとんどいつも、平手打ちと涙で締めくられるのだった。しかしその後、最もひどいことが起こった。文字を覚えない罰として、彼女に長い灰色の靴下を編むという仕事が課せられたのだった。その罰を終えることは簡単なことではなく、彼女はその靴下の上に本当にたくさんさんの涙を流すことになった。その間も、デートレフは砂で遊び、太陽は燦燦と照り輝いていた。そして、エレンがどうか靴下を編む仕事から解放された後も、母は縫い物をする手をちょっと休めて溜め息をつきながら、「本当にこの子だったらどうしようもないわね」と言うのだった。



夏の終わる頃、十五歳のカイがひどい病気になった。母は昼夜、彼のそばにいたので、他の子供たちはほとんど母を見ることはなかった。マリアンネは家事を切り盛りしなければならなかった。そんなわけで、子供たちは再び自由を獲得した。というのも、マリアンネは忙しくて他のことに手が回らなく、子供たちに十分関わる事ができなかったのである。この時期、エレンの勉強もほとんど完全にお休みになったが、その代わり、エーリックと彼女の間には、どちらが本物らしい悪魔を描くことができるかということで激しい競争が生まれた。ある日そこに来合わせていた、マリアンネの友人で牧師の娘であるヘートヴィツヒ・ヤンセンが少々しわがれた声でマリアンネに、「子供たちにいつも悪魔を描かせるなんて止めなさい、そんなこと本当に良くないわ」と言った。

マリアンネはそれを禁じた。そのために、二人は悪魔の絵を描くことに全く興味をなくしてしまった。夜、エレンはベッドに入っても長い間眠れなかった。向こうのテーブルでは小守り女のリーゼが椅子に腰を下ろして縫い物をしていた。

「ねえ、リーゼ、本当は悪魔ってどんななの？」

「どうしてそんなこと知りたいの？」

「ヘートヴィツヒが、悪魔をいつも描くのは良くないと言っていたからよ。」

リーゼは彼女に、悪魔というのは悪いことをなんでも運んでくる悪霊ですごい力を持っているのだ、と説明した。エレンはベッドに腰を下ろして、緊張してその話に耳を傾けた。最後にリーゼは彼女に、心身とも自分を悪魔に売り渡したある男の話をした。この男は悪魔に身を売って自分の望むものをすべて手に入れたが、最後の死ぬ時になって、悪魔が彼を連れ去るために姿を見せて彼と一緒に地獄に連れ帰ったという話だった。

「分かったでしょ、じゃもう寝なさい、エレン。」

カイの病気は非常に長く続いた。そのため、幼い者たちでさえも、陰鬱で重苦しい雰囲気の家全体を覆っているのを感じ

た。みんなはカイを喜ばせることをあれこれ考え出そうとした。彼らはカイのことがとても好きだった。

カイは将来、自然科学者になりたいと考えていた。彼の部屋には石や蝶や、剥製にした鳥が所狭ましと置かれ、部屋の背後にある庭の一本の枯木に、彼は骨格の収集をするために死んだ動物たちを吊るしていた。四人の兄弟姉妹たちは、死んだ猫や溺死した子犬などの小動物を見付けると、すぐにもそれらをその木に吊るした。彼らはカイが起きてきて、それを見て驚くのをひそかな楽しみにしていた。

しかし、カイは再び起きてくることはなかった。——大人たちはすでにずっと以前から、彼が死ぬに違いないことを知っていた。ママは青白い顔をし、その目の周りには深い丸い隈を作り、もはやそんなにたびたび怒らなくなった。父はほとんど話をしなかった。

ある日の午前中、幼いエレンとデートレフは庭で遊んでいた。朝食後からずっと、そこには二人以外誰も姿を見せなかった。その城館の一階は非常に静かであった。

昼頃、エーリックが家から出てきて、鉄の階段のところに腰を下ろして、大きな声で泣いた。エレンとデートレフはエーリックのところを駆け寄り、いろんな質問をして彼を悩ました。彼は益々大きな声で啜り泣いた。

「カイが死んだよ。」

死んだ——この言葉を聞いて、エレンはひどい恐怖に、これまで彼女が明るい日中には決して襲われたことのないような冷たく胸苦しい不安な感情に包まれた。彼女は激しくエーリックにしがみつき、愕然として一緒に泣いた。デートレフも心配そうにしていたが、そのことがいったいなにを意味するのか分かっていないようだった。そのため、彼はママを大きな声で呼んだ。ママの代りに家から飛び出してきたのは年老いたシュティーナだったが、彼女の顔もひどくうろたえ消耗し切っていた。——彼女が涙を流しているのを、子供たちはこれまで決して見たことがなかった。「おとなしくしてね、今はママのところへ行ってはいけません。」

彼女は三人の子供を連れて庭を通って、城館の堀のすぐそばの傾斜地に腰を下ろした。シュティーナとエーリックは、カイがきつと天国へ行くだろうと話した。実際、彼は確かにそんな少年だった。——カイは大変善良であり、亡くなる直前で祈りを続けていた——。カイ自身も確かに、自分が再び健康になることはないだろうと考えていたふしがあった。エレンは黙って二人の話聞いていたが、どうしてそんなことを、そんなに確信を持って言うことができるのだろう——天国ってどんなところなのだろう、と思った。彼女にはそのことの見当さえ全くつかなかったが、それとともに、別の心配も沸いてきた。自分は非常に悪い子だから、死んでもきつと天国には行けないだろう、と彼女は思うのだった。

しばらくするとマリアンネがやって来て、子供たちを居間に連れ帰った。みんなは一緒に二階に上がった。——辺りは非常に静かでひっそりとしていた。カイはこれまでと同じように、ベッドに横になっていた。しかし、顔はこれまでよりも青白く、身体の前で両手を組んでいた。エレンは父親の手をしっかりと掴んでいた。大人たちがみんな声を上げて泣いていることや、カイが本当に死んだことを、エレンは大変奇妙に思うとともに恐れを感じたが、また同時に、カイはこのベッドの上で死んでいるのに、どうして天国に行けるのだろうか、と思った。

母は長男の死から、なかなか立ち直ることができなかつた。彼女は長い間ずっと悩み、憂鬱そうだった。子供たちが自分の周りで、いつまでもカイのことを話したり尋ねたりするのに耐えることができなかった。

そんなわけで、幼いエレンとデートレフの二人のために、女家庭教師が家族の一員として迎えられた。そうして、エレンには今や毎日毎日、規則的な勉強が厳しく強いられることになった。エレンは相変わらず、勉強が好きではなかった。じつと座り続けていることは、彼女にとってひどい苦痛だった。たくさんの涙と永遠に続くような居残り勉強で、毎日は単調に過ぎていった。

デートレフが大きくなると、エレンと一緒に勉強をするようになった。彼は著しく才能があり、姉にすぐ追い付いた。エレンが本当に愚かであることが今や、はっきりするようになった。しかし彼女は、勉強なんかできなくてもいいのだ、と自

分自身に言い聞かせていた。ところが、家庭教師のアンナは全く善良で、随分と忍耐力を持ち合わせていた。彼女はまもなく、エレンには叱責よりも優しい言葉をかける方が効き目があることを悟った。二人はお互い本当に折り合いが良かった。

エレンは母のところから逃れることができて、安心感のようなものを感じていた。——ママという時、彼女は絶えず、卵の上で踊らされているような不安な気分になり、いつもなにかが駄目になっていくように感じていた。彼女は無作法なことをしないようにと一生懸命努力しても、必ず禁じられていることや、幼い女の子には相応しくないことをしてしまうのだった。確かに、それはひどい犯罪行為だと、エレン自身、罪の意識を持つこともしばしばあったが、ママの方が悪いと思う時には、絶対に許しを請うたり、後悔の気持ちを示したりしなかった。

ある天気の良い日に、彼女は誰にも告げずにデートレフと連れ立って出掛け、みんなは二人を何時間もかけて探さなければならなかった。昼食後すぐにも、二人は庭に走り出て牧草地へ向かった。その向こうの「自由ヶ丘」で射撃祭が行われていて、そこから聞こえてくる音楽やたくさんの亜麻布のテントが否応なく彼らを魅き付けたのだった。しかし彼らには、自分たちの領地との境界にある防壁を越えることは許されていなくて、厳しく禁じられていた。しかしエレンは、防壁の向こうを興味ありげにずっと眺めていると、ついすべてのことを忘れてしまい、防壁をよじ登って向こうへ越え、デートレフと手を繋いでごった返す人ごみの中になんと進んで行った。射的場の前で、彼女はかつて会ったことのあるクラウス・ゼーレンスに出会った。この再会は彼女を非常に幸福な気持ちで一杯にした。クラウスは二人の姉弟にハート形のレープクーヘンを買い与え、回転木馬に乗してやり、見せ物のすべてを見せてやった。とりわけ綱渡り師のところから、二人はなかなか離れようとしなかった。その五人の若い少年たちが空中宙返りをしたり、竹馬に膝乗りして踊ったりしていたからである。テントの横には一台の緑の馬車が止まり、その窓のところには鉢植えの草花が置いてあった。——彼らはその中で暮らし、あちこち移動しているのだ、とクラウスは言った。エレンは文字どおり、ピクツと身体を反応させ、なんてこの人たちは幸せなのだろうと思った。今や彼女にとっては、それ以外のすべての世界は消え失せ、忘れられたも同然となった。帰りにク

ラウスが彼らを家に送ってくれたのは本当に好都合だった。

しかし突然、びっくり仰天するようなことが起こった。庭のドアのところにママが立っていたのである。「おやまあ、ずっとおまえたちは一体どこに行っていたのかい。」

デートレフは非常に興奮して、すぐあったことを喋ってしまった、エレンは嘘をついてもどうにもならなかった。しかし、彼女は本当のことを語ろうとはしなかった。ぶたれても、決して彼女はなにも吐き出さなかった。いつものように、彼女は自分で、ピアノの下の低い譜面台の上に置いてある杖を束ねた鞭を取って来なければならなかった。ピアノの下の薄暗がり、に忍び込んでみると、彼女の目の前には相変わらず、「自由ヶ丘」でのいろんな光景が踊っていた。その後彼女は、鞭打つ罰にじっと耐え、歯を食いしばって泣き出さなかった。彼女のこのような強情な沈黙をいつも我を忘れたように怒るママに対して、絶対に負けてはならなかったのである。その日ずっと、エレンは子供部屋に押し込められた。小守り女が部屋を出て行ったので、彼女は独りぼっちで部屋の隅に座って復讐をもくろんだ。彼女は、なんでも喋ってしまうデートレフに対して——そして素晴らしいことはすべて禁止されていることに対して——また犬さえもそんなひどいぶたれ方はしないだろうと、ママに対して、憤慨の気持ちを抱いた。——ママは自分よりずっと犬の方が好きなのであろう、とさえ彼女は思った。こうしたことはもはや辛抱できることではなかった。彼女の顔は怒りと興奮に燃え、いつも叱られたりぶたれたりばかりだ——もういやだ、出て行きたい、すぐ明日の朝にも、と彼女は考えた。彼女は、遠くに向かって限りなく蛇行していく堤防に沿ってずつと歩いて行く自分の姿を思い描いた。というのも、しばらく歩いて行けば、外の世界に出て行くことができらるだろうと考えたからである。——出て行く時持っていくと、彼女は大きなボール箱の中に自分の最も大切にしているものを詰め込んだ。そして、あの曲芸師たちのことを考えた。子供たちを連れ去って、曲芸を仕込むジプシーの話を読んだことがあったのである。彼らはきつと自分を連れて行ってくれるに違いない、そこには勉強も両親も女家庭教師もいない、とても素晴らしい人生があるはずだ、と彼女は考えた。そんなことを考えていると突然、彼女はリーゼが、自分の身を捧げた

者にすべての望みを叶えてくれる悪魔について話してくれたことを思い出した。

晩になり、暖炉のそばの古い大理石のレリーフは薄暮れの中で鈍くきらめいていた。今日もはや、エレンは恐れを知らなかった。彼女は深く物思いに沈み、大きな決心と戦っていた。ついに彼女は、引き出しから自分の最も美しい色の便箋を一枚取り出し、それを持って窓辺にやってきた。そこはまだいくらか明るかったのである。そして彼女は悪魔に対して、ジプシーのところへ行くのを助けてくれるなら身も心も捧げます、と書いたのだった。エレンはその手紙を封筒に入れ、暖炉の上にある飾り棚に置いて頑なな気持ちでベッドに入った。彼女はしばらくの間、出て行くことを延期するつもりだった。しかし数日後、その手紙は消えていた。おそらく悪魔がそれを見付けて持って行ったに違いないと思い、エレンはひどく恐しくなった。しばらくすると、彼女の反抗心は再び鎮まったが、決してもはや無くなるということとはなかった。

しばらくして、母と家庭教師のアンナは時折、絶望に近い表情を見せるようになった。エレンの機嫌が悪くて、とりつくしまがなかったからである。彼女は日に日に、次第にぞんざいになっていった。もう自分が悪魔のものになっているなら、いまさら何のために努力する必要などあろう、と彼女は考え、ただ悪魔がいつ動き出すかをじっと待った。そして、自分が全世界と敵対しているような、孤独でふてぶてしい態度を取った。しかし次第に、彼女は時折、もし今悪魔がやって来て自分を連れ去って行くなら、悪魔が今、突然ドアの向こうから自分を見詰めていたならと考え、次第にひどい不安に襲われるようになった。エレンはもはや、暗い部屋を通って行く勇氣もなかった。宿題をしている時も、時計を見て、早く終わらなければ悪魔が来てしまう、と考えた。歩く時も、敷石や階段や、通路のタイルの数を数え、ただいつも四つ目だけは踏まないように心に決めていた。そうすれば、悪魔は力を自分に及ぼすことができなくなるといふ噂を信じたのだった。しかし時折は、意図的に踏むのを間違えて、悪魔を呼び出してみたい気持ちを押さえることができなくなった。そんな時、彼女は自分のそのやましい心にうっとりして——自分が悪魔に身を捧げていて、今にも悪魔が迎えに来るのだということを、ママや他の者たちにもぜひ教えてやりたい気持ちになった。

一年後、エレンはクリスマスイヴに初めて、家族と連れ立って教会へ行った。そしてこの時、彼女の心の中に大きな変化が起こった。

教会の飾りのない白い空間には、青い星空が絵に描かれ、祭壇のそばに明かりの灯っている二本のクリスマスツリーがあったが、そこは、彼女には言うに言われぬ美しいものに思えた。金色の説教壇にひどく額の禿げ上がった首席司祭が立ち、大変安らかな声で、さあ、君たちに、そしてやがてはすべての民族に大きな喜びが訪れるよう、今日、君たちの前にキリストが現れた、と告げた。エレンは心を奪われるとともに圧倒され、神そのものが自分の頭上に現れて話し掛けているような気持ちになった。その時の彼女の様子は、そうした神などこれまで全く知らなかったかのようにだった。その後突然のように、彼女は神を、そして奇蹟を信じ、キリストが暗い罪の力から自分を救うために、自分のために現れたのだと思った。

首席司祭が説教壇から消えた時、彼女は全く不幸な気持ちになった。しかしその後再び、彼が祭壇の前に姿を見せて説教を唱え始めると、オルガンが鳴り、コーラスがそれに合わせて歌を歌った。そんな音楽を、エレンは今までほとんど聞いたことがないように思った。それは、天から響いてくる天使の声のように彼女には聞こえたのだった。

母の後から教会を出た時、彼女はもう一度、後ろを振り返った。神がその教会内部のあらゆる明かりの輝きの中に、まだ留まっているような気がしたのだった。その後、みんな連れ立って、狭い通りや長いカスターニエンの並木道を通ってネフェルスフースの城館へ帰って行くと、細い通路の明かりの灯った窓の中では、使用人たちが忙しくあちこち走り回っていた。両親はすぐに「緑の間」の中に姿を消し、明かりを灯した。二階にあるマリアンネの部屋の暗がりの中で、兄弟姉妹たちは待機した。ベルが鳴ったらすぐ降りて行けるように、椅子をドアにびったりくっつけて置き、静かにカイのことを話した。彼が亡くなって、もうすでに数年が経っていた。彼らは青白い顔をした長男のカイが生きていた頃の、陽気さについて考えていた。

やっとベルが鳴った。子供たちは転がるように階段を降りて行った。誰もが一番に行こうとした。食堂には白いエプロン姿に帽子を被ったお手伝いたち、背中の曲がった老齡の料理女、庭師、城館や家族と親密な間柄にある、長年働いている忠実な者たちすべてが晴れ着姿で集まっていた。

両開きのドアが開き、広間は明かりとモミの香りに満ち溢れ、誰もが最初は目を眩まされたようだった。

エレンはテーブルの前に立った。そこには彼女の望んでいたすべてが、そしてカイの持っていた一冊の本もあった。ママがやってきて、彼女にキスをした。

「喜んでおくれ、いいかい、これはカイのかたみだよ、おまえたちはカイのことを決して忘れてはいけないよ。」  
ママは泣いているようだった。ママがエレンとそんなに仲良く話すことは、珍しいことだった。この時エレンは、ママの代りに十字架に架けられても良いとさえ思った。彼女の心はクリスマスの幸せで一杯になり、今にも大声で泣き出したい気分だった。

新年になって、彼女は再び教会へ行った。祭壇の横のクリスマスツリーには、まだ明かりが灯っていた。首席司祭が説教を唱え始めたが、今回、彼の予言したのは奇蹟を信じる祝祭の喜びではなく、死や犯罪や、改悛のために与えられている短い猶予期間についての、生真面目なほとんど威嚇するような言葉だった。

エレンはその時から、毎日祈りをして、誰にもはや叱られることのない完璧な子供であろうと、良い決心をたくさんした。かつて彼女は、悪魔に親しく身を捧げたい気持ちを持っていたが、今や、大きな軽蔑の気持ちを持って悪魔を見下すようになっていた。——実際、悪魔が彼女を助けたことなど決してなかったし、また彼女は、もはや悪魔を恐れるようなこともなかった。彼女は、神の方が悪魔よりずっと強いという思いを持っていつも祈ったので、悪魔は彼女に手も足も出すことはできなかった。



しばらくの間、彼女は実際に良い子であろうとして大いに努力し、非常に熱心に神に祈った。しかしそれも困難な状況となり、再び彼女は罪に陥ることになった。

復活祭の頃、家庭教師のアンナは外国で職に就くために家を去った。母が新しい女家庭教師を探している間、二人の幼い子供たちの勉強は長い休暇となった。次第に彼らは、家庭教師なんて見付からなければいいのに、と望むようになった。彼らは今や、自由を存分に楽しく過ごすことのできる別のことをたくさん考えていたのだった。

オレスチエルネ男爵夫人の若い頃の友人が、息子を下の町の学校へ通わせていた。ゲールトという名の、華奢な黒い目の少年の出現は、この二人の姉弟の生活にとって大きな出来事となった。彼らは今や、一人の友人を持ち、二人は競うように激しくこの少年を愛し、話してはいけないことまでも話したい誘惑に駆られてしまつて、いろんな秘密を、つまり、塔や古い牢獄へ通じる錆びたドアの錠の開け方や、庭から小窓を通つて暗い丸屋根の地下室への、そして、由緒ある名前と歴史を持つ自分たちの所有している城館や、庭の中の誰も知らないあらゆる隅々への入り方などの秘密を、彼に漏らしたのだった。ゲールトはそのすべてに魅了され、こうして三人の子供たちは益々強く手を結び、最後には血の契りによつて友情を確固としたものにしてしようと思ひ立つた。

両親がパーティに行つた晩が、その思ひの決行のため選ばれた。というのも、この聖なる血の契りは完全に秘密に、ただ夜の闇の中でのみ行われるべきものと、彼らは考えたからである。馬車が中庭を出て行くと、彼らは急いで子供部屋に駆け込み、白いシーツを身体に巻いて幻想的な装いをして、ひそかに手に入れた蠟燭に明かりを灯し、何度も「血」という言葉が発せられる重々しい呟きをぶつぶつと唱えながら、騎士の間や城館全体に張り巡らされている広々とした暗い床の間を巡礼するようにぐるぐる回り、その後、細い螺旋階段を降りて、かつての祈祷室へと入り、そこで無意識に呟くのを止めた。そののすべすべとしたタイル張りの上では足音はいつも大きく響き、壁の深いアルコーヴの周りには不気味なほど暗かつた。かつて祭壇があつた場所には、まだ四角く盛り上がった高みがあり、そこに彼らは蠟燭の明かりを立てた。三人はなにも話

さず、あまり切れ味の良くないナイフで腕と足に傷を入れ、ガラスコップに血を貯めた。しかし十分な量にならなかったで、その上から少々水を加え、それを彼らは飲み干し、永遠の忠実と裏切り者にはひどい復讐が与えられることを誓った。その儀式が終わると、雰囲気は少し軽いものになった。ゲールトがお小遣いでケーキとワインを買って来ていたので、三人は祭壇の周りに集まって、それらを飲み食いした。

その晩遅く、三人は興奮して食堂に現れ、食事中も彼らの間には何度も謎めいた眼差しと暗示が行き交った。

その後はともかく、集まることが可能な日曜日の晩にはいつも、祈祷室や地下室、或いは塔の屋根裏部屋ではひそかな同志としての結束の会食が催された。——しかしそれは、暗くならなければならなかったし、誰にも知られてはならなかった。そうでないと、すべてが汚されると彼らは考えたのだった。

しかし冬が終わって、外が再び美しく乾燥し始めると、なにか新しいことが起こるに違いないと、彼らは考えた。四月の初めのある温かい白昼に、彼らは庭の中をくまなくぶらついた。そこは、傾斜と灌木と半ば草木に覆われた道から成る、いつもなにかが発見される無限の童話の世界だった。そこには、彼らの知らない植物やアリズカ、鳥の巣、その他多くのものがある、彼らがこれまで一度も足を踏み入れたことのない場所があった。とりわけ彼らを魅了したのは、城館の広い堀だった。そこには、神秘的な緑の水が流れ、その上を奇怪な大蜘蛛がスケートをするようにスイスイと滑っていた。その傾斜地にはすでに白いアスターの花が咲き、柳の枝が深く垂れ下がっていた。最後に彼らは、庭と牧草地との間にある、荒れ果てた峡谷へ行った。その真ん中には、一本の細い歩道が通り、曲がったニワトコの木が二・三本立っていた。

ゲールトはいつものように、他の二人の間を歩いた。この二人は大変よく似ていて同じ服装をしていると、ほとんど双子かと思われるくらいだった。彼らの年齢の違いは二歳あったが、背の高さもほとんど同じで、二人ともブロンドの短い髪をしていて、オレスチエルネ家特有の彫りの深い顔つきをしていた。エレンは年齢を重ねるにつれて、力強く健康になり、同年齢の男の子となら、誰とも互角に張り合えると豪語していた。今日は、三人の同志の会合の日だった。彼らはいくつも

突飛な計画を協議したり、真剣に辺りを調査するために歩き回ったり、峡谷の大きさを目測したりした。その後、ゲールトが宣言することになり、彼は木に跨って、次のような言葉を非常に力強い調子で語った。

「同志諸君よ、ここに我々の国を作ろう——我々の王国だ。この地から王国を広げていこう。そして今や、我々の敵であるあの怒りっぽいアンナ・ユリアーネ男爵夫人の支配下にある隣国を飲み込んでしまおう。我々は彼女を退位させ、我々のために税を納めさせよう。」

他の二人は恐ろしい戦いの雄叫びをあげ、木製の槍を揺らした。

朝早くから夕方遅くまで、彼らは今や、外での仕事に携わった。地面に杭を打ち込み、モミの枝とかコケを持ち込み、小屋を建てた。非常に苦勞して、彼らはこの許可を得たのだった。母は最初、そのことを全く問題にしようとしなかったが、デートレフが何度も彼女のところに行つてせがんだので、とうとう父がそのことを知り、彼らに助け舟を出したのだった。そのうえ、父はそれに活発な関心を示し、自分も一緒に外に飛び出して、子供たちのために彼らの国の境界を指し示したのだった。

王国は今や急速に大きなものになり、道が作られ、畑地と建築場所が測定された。真ん中の空き地には、板と煉瓦から成るひとつの大きな小屋が立ち上がった。これは聖堂だった。というのも、彼らはひそかにキリスト教との関係を断ち、新しい宗教を考えていたのだった。この聖堂には、奪ってきた宝が隠されている契約の聖櫃と、木製の形ばかりの偶像があつた。それは、彼ら自身が何時間もかけて、大いに苦勞して彫り上げ描いたものであつて、彼らはその偶像をモーフと呼び、供え物や歌や粗野な踊りで崇めたのだった。

四週間、彼らはたゆまずその出来事のために励んだが、突然、青天の霹靂のようなことが起つた。ある朝、エレンとデートレフがママに呼ばれたのだった。居間には、黒いさらりとした髪の毛、青白い顔をした一人の女性がいた。姉弟は驚いて顔

を見合わせた。その女性はまさしく、彼らがずっと久しく考えるだにしくなっていた新しい家庭教師だった。二人は彼女に挨拶し、その女性がクレレ・フーンという名前であることを知った。この名前を聞いて、二人はすぐにも吹き出しそうになったが、お互いの顔を見ないようにして笑うのをじっと我慢した。フーン嬢はとても友好的だったが、手はじめとして冷たかった。

「いいですか、これからは、一緒に一生懸命勉強しましょうね。私を好きになって、親しく呼び掛けてね。」

その後、彼らは再び放免された。今日、彼らは外で動き回る気持ちにはならなかった。ゲールトが午後になってやって来た時、二人の姉弟は憂鬱そうに、建てたばかりの小屋のそばに腰を下ろしていた。エレンは、これから再び始まる悲惨な生活のことを思い、絶望的になっていた。勉強、叱責、居残り——このすべての恐ろしい事柄の背後にママがいて、居間には彼女が編み物をする一角があつた。ゲールトが彼らを慰め、キャンディを与えたので、二人の苦痛は次第にいくらか和らいだものになった。その後、彼は葬儀の儀式をしようと提案した。三人とも髪をかきむしり胸を叩きながら、モーフーの回りを踊り、クレレ・フーンに対して呪いの言葉を叫んだ。モーフーが忠実な召使である自分たちに力を貸してくれるなら、彼の力からして当然、彼女を焼き殺してしまうことができる、と彼らは考えたのだった。その後、三人それぞれ小屋の前に横になって、これからどうしたらいいかを話し合った。三人ともいらいらして好戦的な気持ちになり、それをどこかにぶちまけたいと考えた。そこで、デートレフが用心深くそばの傾斜地をよじ登り、村の子供たちが花を摘むために牧草地にまた入って来ているかどうかを確かめることになった。やはりそこには、かなりの数の子供たちが入って来ていて、野の花を引き抜き草を踏みにじっていた。今やエレンとゲールトの二人も立ち上がり、土手沿いに身を屈めて忍び寄って、敵たちを取り囲んだ。まもなくすると、激しい殴り合いが始まった。彼らは同志三人で少なかったが、勝利を得て数人の捕虜を捕らえた。他の敵たちは、怒って威嚇するような言葉を吐きながら逃げていった。その後、裁判が行われることになった。三人は捕らえた少女たちをハンカチで目隠しして、土手から突き落とされた。激しく抵抗した一人の少年を、彼らは引きずって町ま

で連れて帰ろうとしたが、途中でぶちのめし、腕と足を掴んで草地の上を引っ張って小屋まで連れて行き、さらにそこで数回振り回して、イラクサの大きな茂みの中に放おり投げた。こうして彼らの残虐な行為は終わった。裁判にかけられた少年は、服をひどくぼろぼろにして逃げ帰った。その後、エレンとデートレフはゲールトと歓声を上げながらモーフの周りを踊ったのだった。

こうした勇ましい日の後、エレンとデートレフには再び、勉強の生活が始まった。新しい家庭教師が同じ家に住まないで、勉強の時だけやって来るのは少なくとも幸せなことだった。子供たちはまもなくすると、この家庭教師との勉強は、今はずでに思い出の中で文字通り素晴らしいものになっていた、かつての勉強のようにはたやすく終わらないだろうと確信するようになった。

母はエレンのことを事細かく、この家庭教師と話し合った。この女家庭教師は、どうにもなりそうにないエレンに厳しくかつ好意的に接して、彼女を柔順にしようと決心していた。しかし初めから、彼女は絶望的にならざるを得なかった。エレンはまさしく、心に迫るような彼女の目と、何度も湿っぽく戒めるように求める握手を拒んだのだった。——外は夏の盛りだった。窓の前の芝生は益々大きく成長し、ちょうど色とりどりの草や花のそよぎを眺めることができる季節だった。芝生の向こうには、栗の木が白い花をつけた緑の垂れ枝を地面に広げていた。——エレンとデートレフは退屈そうに向かい合つて腰を下ろし、時折、時宜を得ずに突然笑い出し、きちんと黒髪を分けているこの女家庭教師の言うすべての言葉に心底から逆らったのだった。勉強の時間が終わると、彼らは逃げるように外に飛び出そうとしたが、その度に何度も、インク瓶や本やその他のものを片付けるように呼び戻されるのだった。その後、二人は一目散に小屋に向かって走り、そこでゲールトを待った。

毎日、新しい考えや新しい計画、行動が持ち出された。彼らは水路を掘り、下の掘の中に島を作り、古いこね桶や板のイカダに乗って泥の混じった緑色の水の上を航行した。これらは堂々とした船団のつもりだったが、遠くの岸から計り知れない

いほど多くの宝を運ぶたびに、何度も座礁した。

毎月、職務や位を新たに变えて、彼らは交代して王や大臣や高位聖職者に就き、多彩で光沢のある綿布で出来た華美な服装をしたり、金箔紙で出来た王冠や司教冠を被ったりした。彼らは職務や位に倣った名前を名乗ったり紋章をつけたりして、それぞれが自分の一族の血統についての複雑な作り話を考え出した。頭文字が途方もなく丁寧に、かつ奇妙なほど大きく書かれたそれらの作り話は、契約の聖櫃の中の、法令の載っている長い巻紙の横に保管された。

それから夏が過ぎ去り、小屋は苔で朽ち、外での遊びは終わりとなった。そのために今度は、城館全体を使って王国議会や自分たちの描いた絵の美術展覧会、モーフの周りを回る素晴らしい祝祭の行進が催され、騎士の間では馬上試合が行われた。緑色に塗られた木製の庭椅子が大きく立ちはだかる勇ましい馬の代わりに用意され、それに跨った戦士たちは互いに嘲笑的な言葉を浴びせ合いながら戦いを挑発し、構えた槍でもって相手を鞍から突き落とそうとした。

冬のある日曜日の晩、三人の子供は彼らだけで食堂にいた。

今日はもはや、正規に行くように取り決められていた遊びは終わっていた。エレンはまだ、明日のために勉強しなければならなかったし、ゲルトは何度も、もう家に帰ると言っていた。しかしその度に、デートレフは新しいなにかを探し出してきて、ゲルトを引きとめようとした。彼は本棚の中のすべてを引っ掻き回し、とうとう祖母のものと思われる古い絵本を山のように取り出して来た。彼らはそれらをあちこちめぐって、外国の動物や植物や民族衣装などのすべてを退屈そうに見ていた。

「ここに内蔵や骨格が載っている」と、ゲルトが言った。エレンは自分の読んでいた聖書物語から目を逸らして言った。「なんていう本なの、そんなのまだ一度も見ることがないわ。」

「それはここの一冊下にあったよ」とデートレフは言った。

「君たちのお母さんが、きつと君たちに見せたくなくて隠していたんだよ。この本には、君たちがまだ見てはいけないうなことが載っているよ。」

ゲールトは本を閉じようとしたが、二人がそばへ急いで寄ってきた。「見てはいけないうなことってなに？——こっちに見せて。一体、その胎児ってなに？——ゲールト、知ってるの。」

「うん、知ってるよ。——生まれる前の赤ん坊だよ。君もそうだったのだ。」

エレンとデートレフの姉弟はいろんなイラストを見て、驚いて黙っていたが、その後、笑いこけてしまった。

「こんなのが生まれて子供になるの？」

「馬鹿なことを言うなよ」とゲールトは言い、真面目に知識をひけらかすように、二人にその両者の関連について説明した。二人は笑うのを止め、生命には威嚇されるような暗い深みが隠れているのだという予感を、初めて心の中で目覚めさせた。その予感は二人を奇妙な気分させ、驚愕させたようだった。

その晩から、彼らの考えや会話はほとんどもっぱら、彼らが理解しようとしても完全には理解できなかった大きな秘密を巡って回った。彼らは三人とも、それを非常にまじめに考えた。——彼らとって世界全体は、考え尽くすことのできない、身の毛もよだつような恐怖の深淵に変わってしまった。彼らは世間の大人たちのすることを恥ずかしく思い、そして軽蔑した。「ほとんどすべての大人たちはどうして」とゲールトは言った。「そんな無意味で不快なことと関わるのだろうか。結婚した人には子供ができる、それはおそらく間違いでなからう。しかしその他の人たちはどうなのだろう。ただ単なる楽しみのためなのか。——どのようにして彼らは楽しむのだろうか。どういうわけで彼らには子供がいなのだろうか。」

こうして、彼らには謎が謎を呼んだ。ゲールトもすべてを説き明かすことができなかつた。

「一体どこから君は、そんなすべてのことを知ったのかい」と二人はある時、尋ねた。「母からだよ。——僕の知りたいことは何でも、母は言ってくれるんだ。」

エレンとデートレフは非常に驚き、彼がそんな母親を持っているのを羨ましく思った。二人の母との関係は、それとは全く違っていた。非常に多くのことを知ってから、二人はほとんど罪に近い意識を持って行動したが、両親がそのことに気付くのではないかと恐れた。

王国はそんなことがあって、次第に忘れられていった。少なくとも彼らは、もはやかつてと同じような熱心さでそれに携わることはなかった。その後再び、自由な時間がやって来ても、彼らは王国に携わるよりも、むしろ連れ立って遠くまで散歩に出掛けることを好んだ。母は、エレンがいつも男の子たちとばかり一緒にいるのが気に食わなかった。しかし、ゲールトとデートレフは、彼女と一緒にいることが出来るかぎり、彼女から離れようとはしなかった。

「私としては、この夏のうちにはと思っていたが」と母はどうとう言った。「そのうちに夏も終わってしまった。だからこれからは本格的に、エレンが分別のある女の子になるように教育しなければならぬ。」

これまでそんなことは、口に出されて言われたことはなかった。エレンはいつも、服をぼろぼろにしたり、かき傷やこぶを作って泥だらけになったり、或いは首までびしょびしょに濡らして家に帰って来ていた。エレンはどこからこうした手に負えぬほどの荒っぽさを手に入れたのだろうか、と母は思っていた。エレンには、木だったらどんなに高くても登れないことはなく、どんな堀も広すぎて飛び越せないことはないように思われた。そんなことをして叱られる度に、いつも彼女は、自分が男でないのをひどく呪った。

嫌なこともいろいろあったが、三人が仲間として、素晴らしい天気の中を一緒に過ごした夏もあった。彼らは午後の長い間、浜辺に出て堅固で小さな堤防の草の中に横になった。空気は非常に澄み渡り、遠くの島々はくっきり見え、遠くの海鳥の長く引つ張ったようなせつない鳴き声の他にはなにも聞こえなかった。緑の干拓地を通って帰る道には、堀がいくつもあつたり、牡牛が放し飼いにされたりしていて、帰るのに非常に危険で邪魔になるものもたくさんあつた。また彼らは、荒野の奥地までずっと入り込んで「絞首台のある山」へ行くこともあつた。——四十年前にそこで最後の死刑執行が行われたとい



うことだったが、今そこには、ただ一本の古い支柱が残っているだけだった。子供たちは赤いヒースの上に腰を下ろしたが、カラスが飛び立つごとにぞっと身震いをした。そこで彼らは、しばしばこれからの人生について話し合った。ゲールトは秋になると、別の学校に通わなければならなかった。そのことは、彼ら三人にとつてひどいショックだった。彼らは、これから別れ別れになってどのように生き、大人になってなにをするつもりかを話し合った。三人は大人になってもまた、会うことを約束し合った。

「いいかい、エレン。君はおそらく、将来いつか結婚して子供を生むだろう」とゲールトは何回も言った。エレンは怒ってそれに反対した。誰かの奥さんになるなんて考えることは、彼女には恐ろしいことだった。それ以来、彼女は能力を倍にも駆使してでも、人より抜きん出ようと考え、将来の粗っぽい計画について語るようになった。彼女はいつも、いつかジプシーのところへ逃げて行きたいと考えていて、ひそかに指物師のところや竹馬の膝乗りを習ったり、とんぼ返りの練習をしたりして、来るべき時期のために備えていたのだった。ああ、できれば歳の市を移っていくあの緑の馬車に乗ればなあ、それ以上に素晴らしいことはあるだろうか、それとももしそれが不可能なら、水夫の服を着て海に出て行ければなあ、デートレフの服を着れば、誰も自分のことを女の子と思わないだろう、と彼女は考えた。

エレンがそんな話をする、弟のデートレフは勝ち誇ったように、「エレンの鳥籠」のことを持ち出し、二人の少年は彼女をあざ笑った。エレンは少なくともすでに二年前から、カナリアを入れるとつもなく大きな鳥籠を作ることに携わっていたが、いつもうまくいかないで、いつも別の方法を繰り返していたのだった。ある時、彼女は葉巻の箱を壊して鳥籠をひとつ作り上げることができたが、その中は大変暗くて、鳥はふさぎこんで鳴かなくなってしまった。そんなことがあっても当然のように、彼女はまた新しいものを作ることに挑戦し続けた。

「よく言うわよ」とエレンは怒って言った。というのも、デートレフは将来、哲学者になって、大きな作品を書きたいと考えていたのだが、彼の書いたものは彼女の目にはどうみても芸術作品には見え、このうえもなく退屈なものと感じられ

たのだった。

秋の日がやって来て、庭は湿っぽく、なにもなくなり枯れ葉ばかりになった。嵐で木々の大きな枝はもぎ取られていた。子供たちは相変わらず緊密な関係を保っていたが、悲しかった。——ゲールトがいなくなることは、彼らにはあたかも仲間が死んで行くように思われたのだった。ゲールトが去って行く最後の日に、彼らはひどく悲しみながら、小屋やモーファー神殿を壊し、偶像を堀のなかに沈めた。そんなものをすべて残しても、一体これからなんになるだろう、と彼らは考えたのだった。しかし実際そうしてみると、彼らには自分たちが昨年から限りなく随分と年齢を重ねてきたかのように思われた。

晩になると、彼らはゲールトの持ち物を子供部屋から持ち出すために、一緒に二階に上がった。デートレフがまだ部屋の中をあちこち探し回っている間、ゲールトとエレンは手を取り合って天井裏に上がり、大変無気味な大きなカチカチという音をいつも立て、時を打つ時ワシミミズクが吠えるような音を出す大きな柱時計の横に立った。すでに辺りは薄暗かった。エレンはもっぱら、ゲールトの白い麦藁帽子と大きく見開かれた黒い目ばかりを見詰めていた。彼女は彼の首に抱き付いて、何度でも彼にキスしたい気持ちの心の中ではひそかに持っていたが、そうする勇氣はなかった。そうこうするうちに、デートレフが上がって来た。三人は最後に、暗い騎士の間を通過して階段を降り、中庭を歩いて家の前の街灯のところまで一緒に行った。そしてゲールトは去って行った。

エレンとデートレフの部屋は隣同士で、彼らの部屋を仕切っている扉はいつも開いていた。彼らがベッドに入ると、母が上がって来て一緒に祈った。その晩、エレンはほとんどなにも語らず、ママがまた、意地悪なことを言うのではないかとひどい不安に駆られた。しかし彼女は、ただ次のように言うだけだった。

「ゲールトがいなくなったのは本当に残念だけれど、これからはきつと、あんなに随分とはしゃぎ回ることもなくなるに違いないわ。」

ママも、ゲールトがいなくなったことを残念に思っていた。——そのことはエレンをたいそう感動させ、彼女はどうか

自分の気持ちを抑えることができた。母が再び下へ降りて行くと、そっと彼女はデートレフの部屋に忍び込み、彼のベッドに腰を下ろした。彼らは何度も抱き合い、一緒に泣いた。その後彼らは、なおも長い間ゲールトのことや、彼のいないこれからの話だけつまらないものになるかについて話し合った。

ゲールトが去ってからは、エレンの子供時代の最も大きな喜びも消えて行つた。そして彼女は、自分の生活を再びあのように充実したものにしてくれる出来事が現れるのをひどく待ち望んだ。

デートレフもギムナジウムに通うようになった。彼は新しい友だちを見つけたが、いつもそれはすぐにも入れ代わつた。かつてのような三人のまともな友情は、それ以降、もはや簡単に実現するものではなかつた。母はエレンの自由をますます強く制限するようになった。今や母は突然、これまであまりにエレンの面倒を見てこなかつたことに気付いたように、エレンに対して、しばしば天気の良い自由な午後にも居間で針仕事をするように強制するようになった。エレンはこのような仕事が好きで、絶望的な気持ちで嫌々ながらこれに携わつた。彼女は針仕事が好きでも嫌いだつた。彼女の一日のすべては、勉強と針仕事という二つの嫌なことから逃れようとする、いつも新たな試みから成り立っていた。彼女は家を出るのが可能な時にはこっそり抜け出して、風が逞しいこずえの間を吹き抜けていく柵で囲まれた牧草地に行つた。そこなら母が呼んでも聞こえず、しばらくは確実に母から逃れることができる、と彼女は考えたのだつた。彼女の心は、いくつもの親しげな響きでもって彼女に話し掛けてくる、この故郷全体と心から結び付いていた。彼女はみんなとここで遊んだ長い夏の時間のすべてを思い起こした。その毎日は、そしてその季節はいつも変わらず、例えばゲールトが加わったり、すぐに休暇になり、或いは果実が熟したりするような事柄をもたらしたりして、非常に大きな喜びや勇気を育んでくれたのだつた。その頃彼らは、いつも限りなく多くのことを意図し、これからの数年やその後のためにそれらを思い描いていた。それらはあたかも、勝手に拾い上げさえすれば手に入るほど多くの宝や富がいたるところに存在するかのようだつた。

しかしこうした様々な楽しい時の中にあつても、エレンの心の底にはいつも苦々しい思いがあつた。——ママのことだつ

た。物事を考えるようになって以来、エレンはママによっていつも見守られているように感じていた。どうしてだろう、どうして自分がドアのところに入って来ただけで、ママの目はいつもあのような奇妙な意地悪い目つきになり、怒ったようでもほとんど非難するような声の調子になってくるのだろうか、と彼女は考えた。母と二人だけで部屋にいと、エレンはいまにもなにか恐ろしいことが起こるのではないかと、なにかひどく冷やかな気持ちになった。夜、時折彼女は、母が大きなハサミを持って自分の後ろから追って来て自分を殺そうとしている夢を見ることがあった。しかし今、彼女はそんなことにもほとんど慣れるまでになっていた。ちょうど、生まれながらに肉体的欠陥を持ち、生涯再びそれを捨て去ることができないことを知っている人がそれに次第に慣れていくように。しかし。そうしたことに耐える力はどこから生まれて来たのだろうか、エレンは再び敬虔さを持ち始めていた。——神だけが、彼女を救うことのできる唯一のものだったが、その神はずっと遠くにあつた。彼女は文字通り激しく、再び神に近付きたいと考えた。日曜日ごとに教会に行くのでは、彼女にはもはや十分でなかった。彼女は寝ても覚めても、暗記している長い歌や教理問答書のすべてをいつも膝まずいて唱えた。家庭礼拝の際のように、ただじつと腰を下ろして手を組んでいるだけでは彼女には十分に厳肅だとは思えなかった。しばしば彼女は夜中に起きてカーテンを上げ、星を眺めながら一人でお祈りをした。或いは昼間も、邪魔をする者がいないと分かると、祭壇めいたものを作ってその前で祈ったり、大事にしているカナリアが中にいる鳥籠を椅子の上に置いてその周りを花で飾った。そのようにして過ごした数時間後なら、彼女はすべてに耐えることのできる熱烈な勇気を感じるのだった。そんな時、不当に母から叱られても、彼女はほとんど喜びを持ち続けることができた。

十四歳になって、エレンの生活に再び変化が生じた。彼女はダンスのレッスンを受けることになった。それはまぎれもなく、当時彼女に要求されていた長いドレスを着ることや手を清潔にしておくことと同様、彼女に対するひとつの教育計画だった。

多くの子供たちと一緒にいることは、彼女にとって全く新しいことで、最初いくらか不安を感じた。しかし、いつもいくらかほろ酔い加減の、足の長いダンス教師がホールの真ん中に立ってバイオリンを弾くその周りを、生徒たちみんながぐるぐる回る時、彼女は陶酔のようなものに包まれた。そんな時彼女は、普段の生活が大変厳しいものであることを忘れた。他の女の子たちに比べて彼女は、いくらか取り残されたように感じていたし、とりわけ城館の娘として身なりがとても良くないことを不愉快に思っていた。そのような身なりに対するセンスを、彼女の母は全く持っていなかった。――彼女は毎年、何度も継ぎ当てしたり丈を長くしたり、或いは裏を返したりした流行遅れの古い同じ服を着ていた。エレンはこれまでそんなことにあまり気を留めなかったが、今、彼女は何時間も鏡の前に立ち、身なりのことをあれこれ気にした。そんな時、ママに見付かると、いつも彼女は大目玉を食らった。「きちんとした身なりをしていればいいのです。あちこち引き裂かないように気を付けなさい。その他のことはどのようでも良いのです。」

しかし、町の子供たちが彼女より優れているのは唯一のそのことだけではなかった。彼らは恋をしたりデートをしたり、仲間たちと散歩をしたり、菓子職人のところに行ったりした。こうしたいろんな楽しそうなことをエレンはいつも耳にして、それらが非常に魅力的なことのように思われ、自分でもぜひやって見たいと考えた。そこで彼女は、デートレフをそそのかして一緒にそうしたことをやってみた。二人はいつも新しい口実をもうけて町へ出掛け、他の人たちの中をぶらぶらと歩いた。騒ぎと哄笑の中をひそかに歩き回ったり、小さな菓子店の暗い裏部屋に入って、そこであちこち飛びかう悪ふざけやあてこすりのすべてを共有したり、ダンスのレッスン中にママの目に発見されることに激しく心を動悸させながらも意地悪く仲間と約束事をしたりすること、それらすべてに彼女は素晴らしくも罪深い思いを感じたのだった。

彼女はすべてに以前とは違った視点を持つようになっていた。以前のエレンは、自分の周りの狭い範囲の中で、自分の内に閉じこもって漫然と日々を送っていた。しかし今や、世界は広がり始め、壁の向こうにあって激しく躍動し、強く自分の心を興奮へと誘うもうひとつの生活のあることを彼女は知ったのだった。

こうした変動の夏の終わる頃、両親はかなり長い旅に出た。エレンは九月の日々を楽しみ、大きな勝利の感情をもった。というのも、家庭教師のクレレー・フーンが病気になったからである。エレンはそのことを自分のせいだと思った。二人はこの数年間、来る日も来る日も大きな丸い勉強机に向かい合い、この哀れな萎黄病の家庭教師に、エレンは子供特有の情け容赦のない憎しみを込めたいやがらせを浴びせかけ、文字通り彼女を責め苛んだのだった。エレンは彼女に対して、微笑むことも一生懸命勉強することもしなかつたし、彼女が自分のことに口を挟むことも許さなかつた。エレンはフーンの大きな親しみや厳しさに対しても、それと同じような大きな冷酷で拒絶的な頑固さでもって応え、毎晩のように、神がクレレー・フーンに怒りを見舞うように祈つたのだった。

フーンが病気になつたという知らせを受けて、エレンは自分の部屋の中で膝まずいて神に感謝した。窓辺ではカナリアが歌い、太陽が笑つていた。彼女は勉強しなくてもよくなつた。彼女を苦しめるものは沈黙し、消え去つた。

その後、楽しい日々が続いた。姉のマリアンネは穏やかに妹や弟を見守つていた。今や、彼らの扱ひも、彼女にとつてずつとたやすいものになつた。彼女はいつも、以前と同じように優しい物静かな姉として振る舞つたので、妹や弟たちは進んで彼女のところにやつて来て頼みごとをした。しかし彼女の状況は必ずしも容易というわけではなかつた。——母は怒りっぽく偏つた考え方をしていたし、パパは怒りを我慢することができなかつた。そして妹と弟も、たえずなにかにつけて激しく反発し、要求とか願いを押し付け、口答えばかりをするのだった。

今や誰もがそれぞれのやりたいことをして、平和であつた。エレンとデートレフは一日の半分を果樹の下に腰を下ろしたり草の上に横になつたりして、禁じられていた本を読んだ。二人は互いに『群盗』を朗読し合つたり、『ファウスト』をどちらがよく理解しているかを競い合つた。時折二人して、姉の庭仕事を助けることもあつた。たくさんの方格子が格子のそばに立ち止まって、家の中を覗いた。というのも、オレスチエルネ一家の思春期の三人が一緒に集つていて、いつも遠くまで響き渡る嵐のような高笑いが聞こえて来たのだった。とりわけ、愛情はこもつてはいるがぶっつけな言葉である「若

者」という言い方で呼ばれていた両親がそこに居合わせない時には、その高笑いはさらに大きかった。

この時期、エレンはしばしば機会を見付けて、誰にも気付かれずにそっと外に出掛けて行くことがあった。その頃、彼女はあちこちさまよったが、それには特別な背景があった。エレンは恋をしていたのだった。彼女の思いのすべてはギムナジウム最上級生の、ある赤毛の男の子に会いたいという気持ちで一杯だった。——それは、若者たちが黄昏の路地や市立公園の中を行ったり来たりしている、霧に覆われた秋の日々のことだった。エレンは、自分の恋が実りのない望みのないものであることを知った。というのも、その少年は彼女の届くことのない、遠くて高い大人の世界に位置していたからであった。しかし彼を見たり、彼から挨拶されたり、夜ごとベッドのなかで彼のことを考えるだけでも、彼女にとっては確かに全身の力が抜けるくらい幸せなことだった。

この小さな町ではなにもかもが人目に付いた。男爵夫人は旅から帰って来るとすぐにも、親切な知人たちから、幼い二人の子供の評判が悪いことを聞かされた。店の呼び鈴や窓ガラスさえも、二人にかかつては安全ではないということだったが、彼女を最も怒らせたのは、エレンが少年たちと町をうろついているという噂だった。その後突然、エレンはどうしようもない状況に投げ込まれたが、この度エレンは、公然と反抗する勇氣を持ち合わせていた。そのため、彼女と母との間には激しい争いが生まれた。「私を拘束したいのなら、すぐにもそうすればいいわ」と彼女は叫んだ。実際はそれがどんなものになるのかエレンには想像すらできなかったが、彼女は実際、拘束を受けることになった。いつも見張られ、こっそり目を盗んで出掛けて行くことも全くできなくなった。

この年、彼女は兄や弟たちと一緒にスケートに行くことさえ許されなかった。冬の午後何日間も、彼女は雪に覆われた庭を物悲しげに見て過ごし、今おそらくあの人はスケートをしているのだろう、と実りのない恋を思い描いた。彼女には、彼に会える可能性は全く断ち切られていた。たまたまエーリックが彼の名前を言った時、彼に対する憧れは益々燃え上がり、

彼女は震え、赤くなった。彼女が心の中で感じていたたぎるような不安は、時折はひどく陽気さを見せることもあったが、しばしば荒っぽい癩癩となって吐き出された。

エレンはまた、言うに言われぬほどいらいらしていた。朝から夜までいつも、母は彼女を叱りつけ、いつもその目は、おまえは一体なんのためにこの世に生きているのか、と言っているようだった。

激しさの点では、エレンも母になんらひけをとらなかつた。しばらく彼女は黙って聞いていたが、歯と歯は噛み合わされ、ぎしぎしと音を立てていた。その後、彼女は外に飛び出し、ドアをボタンと閉めた。ママはエレンの後を追ひ、あつと思つた間に彼女に追い付いた。突然、怒りに燃えたママの目を間近かに見るや否や、エレンは激しい一撃を顔に感じた。母はこう言った。「おまえなんかとつと消えておしまい、もう飽き飽きしたよ、おまえのことで苦しむなんて。」

その後、部屋で一人になると、エレンは自分の中で荒れ狂っている怒りをどこへ向けたらいいのか、どうしたらいいのか分からなくなつた。彼女は頭を壁のいたるところにぶつつけた。すると、目の前で火花が飛び散り、その痛みが再び彼女を我に帰させた。

そんな日々、彼女はずっと二階に居続けて、母の前に姿を見せることはなかつた。彼女はベッドに横になって、数多くの計画に考えを巡らした。再三、彼女は、成人になったらすぐにも家を出ることを思い描いた。サーカスに入りたいという思ひは、今の彼女には次第になくなつていた。そうするには遅すぎるだろう、と彼女は考えたが、相変わらずまだ、いつの日かこの耐え切れない生活から自由になつて、世界に、見知らぬ前途の開けた世界に出て行くのだという思ひは、彼女の心の中には確かなものとして残っていた。

ある日曜日の朝、エレンが朝食のために下へ降りて行つた時、ママはちょうど手紙を読んでいた。

「もう万事が整つたわ」とママは言つて、その手紙を皿のそばに置いた。「エレン、おまえは復活祭にはAの寄宿舎に入



りなさい。」

エレンはママの言うことをぼんやりと無頓着に聞いていた。これまでも、この寄宿舎に入ることについてはたびたび話に出たことはあったが、これまで彼女はそのことを決して本気で信じたことはなかった。

復活祭までにはもう数週間しかなかった。彼女は周囲の人たちを、最後までありつたけひどい重苦しい気分させた。しかし、デートレフと二人だけの時はそうでもなかった。その時には、デートレフのことや故郷から離れなければならないという彼女の苦しみはすべて消え去っていた。二人はこれまで一日だって離れたことがなく、物心が付いてからずっと、体験も感情もすべて分かち合って来たのだった。二人は、これから近いうちに、お互いが引き離される日が来るのだとは思ってもしなかったが、その日は実際やって来て、そして過ぎて行った。——晩に、エレンは母と一緒に出発することになっていた。

食後、エレンとデートレフは二階にあるかつての子供部屋に忍び込んだ。食事の際、彼らはワインを手に入れていた。それを飲むと、彼らの頭は熱くなった。——その後、二人は長い間抱き合い、二年間——限りなく長い二年間、互いに離れ離れになって勉強しなければならぬ、そして苦しむことになるだろうと考え、非常に辛い涙を流して泣いた。——二人は、この二年間が取り返しの付かないものとなって過ぎ去り、それは再び、決してやって来ないのではないかとも感じていた。二人は呼ばれると、赤い腫れ上がった目をして下に降りて行った。その後みんな一緒に駅へ行った。二人は他の人の前では、もはや涙も見せずキスも交わさなかった。

デートレフは歯をぐいと噛み合わせ、姉や兄とは離れてプラットホームに立ち、エレンからじっと目を離さなかった。その後、彼女と母の乗った列車は広い低湿地の平原に消えて行った。

「エレン・オレスチエルネ、お入りなさい。」

彼女は入って、指示どおり三回お辞儀をした。——ドアのところまで一回、それから絨毯に大きな花の描いてある部屋の真

途中で、そして最後に老婦人の前に立った時に。

A自由貴族宗派別女学校監督教区長は書き物机に着いていた。彼女はすでに六十歳を越えていたが、休憩を取ることなど必要としない女性だった。石に刻み込んだような彼女の厳しい顔の中にある額は、広くピカピカと光っていて、変わらぬ精力的な表情を見せていた。——彼女はきちんと真つすぐ背筋を伸ばして腰を下ろしていたが、彫刻を施された椅子の背もたれに置かれた白い痩せた手にだけは、老人特有の疲れのようなものがあつた。

「なんてことをしたの、エレン。あなたはヘートヴィヒ・フォークトの顔をぶつたの。」

「はい、そうです、彼女が私を怒らせるようなことをしたので、私は我慢することができなかつたのです。」

監督教区長はエレンの手首をつかみ、少しばかり明るい窓辺に連れて行つた。

「いいですか、特に物の言い方には慎みが必要です。」

エレンはなにか言おうとした。しかし発言を許されなかつた。厳格な声はますます強く、激しい鋭く響き渡るようなSの音を吐き出していた。

「そんなに逆上するなんて断じて好ましくありません。ここでそんな振る舞いをするには許されません、エレン。もし不正を感じるなら、私のところにやって来て苦情を言うべきです。あなたたちは下町の子供ではないのです。」

「できればそうしたいと思います」と、エレンはどうとう監督教区長の話に割り込んで言った。彼女は、どうにも自分自身を抑え切ることができないほどに憤慨していた。

「なにを言っているのです、あなたは。」その声はますます厳しく、Sの音はますます鋭くなつていた。「気を付けなさい、エレン。あなたがどれほど真つ当な家柄の子供なのか承知しています。もし穏やかにあなたと折り合えなければ、別の方法を取ることもあると、あなたのお母さんとお話しています。」

愛しいエレン——監督教区長さんは、おまえがとても我がままで、他の女の子たちとも仲よくやっていけない、と手紙をよくしています。おまえは本当に、いつもいつも私たちを悲しませ続けるのですね。私は監督教区長さんに、おまえを厳しくつけてもらうように頼みました。良い子になるように、これからおまえが努力してくれることを私たちは希望しています。もうこれ以上、今日は何も言いません。毎日、神に祈っています、おまえの性格が変わるようにと。

兄弟弟たちもよろしくとのことです。

母より

お姉さん、手紙どうもありがとう。あなたがいなくなってひどく寂しいです。学校ではますます引つ込み思案になってしまつて、よく一人で散歩をします。午後はふつう詩作をしています。

黒と黄色の混ざつたあなたの鳥は死んでしまいました。でも悲しまないで下さい。もう一羽の私の雄鳥をあなたにあげます。ゲールトの写真を二枚手に入れましたが、ママはそれをあなたに送ることを許してくれません。今はそれ以上にも分かりません。あなたの手紙はいつも読まれていますので、まともなことを書いても無駄です。

デートレフより

Aにて、一八八五年六月

：明日、私はDの人たちや彼女の母親と一緒に町へ行くことができますが、その時ひそかに、この手紙を投函するつもりです。この手紙を私はイエンス・ケテルゼン宛てに送ることにします。彼がきつと学校であなたに渡してくれることでしょう。——ああ、デートレフ、あなたはここがどんなに恐ろしいところか、全く想像もできないでしょう。監獄にいるように閉じ込められ、全く外出さえできません。ただ一度だけ外出できるのも退屈な散歩の時だけです。でも、その散歩もきちん

と並んで歩き、農場にいる荷馬車のすべてに膝を屈めてお辞儀をしなければなりません。それ以外はいつも、一日中勉強ばかりです。そのうえ、勤勉な者たちは散歩の際もベッドに入っても勉強しています。私はこれまでもう何度もひどい目に会いました。ここに入った最初の頃には、別の女の子に平手打ちを食わせて階段の下に滑り落としたことで、そのような目に会いましたが、最近、私たちは庭に入ってセイヨウスグリの実を盗んだのですが、そのことで今はもう、自由時間でも下へ降りて行くことができません。私たちが盗みをしたという証言をした者がいるのです。その他にもいろいろなことがあります。——ところで今、私には好きな女の子がいます。エディータという名前で、とびつきり可愛い子です。私は彼女に夢中で、もうたくさんの詩を作って彼女に捧げました。——聖ミカエル大天使の日には、第一クラスに入ることができると願っています。そうしたら、私たちはずっと一緒にいることができます。でも残念ながら、彼女はもう次の復活祭には行ってしまうのです。ああ、ところで、私はどれくらいまだ、ここで辛抱しなければならぬのかしら、一年間かしら、私には分からないの。監督教区長は私には我慢のならない人です、ちょうどママと同じように。二人とも、楽しい時には誰でも騒いでしまうものだということが分からないのです。私たちは、ここではまさしく「礼儀正しく上品に振る舞」なければならぬのです。

あなたに、私たちの監督教区長を描いた戯画を一枚送ります。他の女の子たちは、この絵を実物にとてもよく似ていると言ってくれます。私は自由時間の時には、いつも絵を描いています。でもお願いだから、絵もこの手紙も放り出したままにしておかないでね。

エレンより

ネフェルスフースにて、一八八五年十月

愛するエレン、あなたが第一クラスに進級したことを知って、私たちはとても驚き、喜んでいます。あなたがかつての怠

惰を反省して、立派に進級したことを聞いて、私はとても嬉しく思っています。しかしこの次は、行儀の点でも良い成績が取れるように頑張つて下さい。あなたの持ち前の元気の良さを押さえつけることが、あなたにとってどんなに辛いことであるか、私にも分かります。でも、よく考えて下さい、あなたは今、堅信についての授業を受け、若い立派な大人になる準備をしなければなりません。私たちはみんな多かれ少なかれ、生活というものに順応していかなければなりません。お父さんからもくれぐれもよろしくとのことですよ。

Aにて、一八八五年十一月

最愛のデートレフ、ちょうど私は階段のところで寄宿舎の小使いさんをつまえることができました。この人がこの手紙を投函してくれるはずですよ。——大きなひどい出来事が起こりました。もしクラス全体の者がそこにいなかったら、私とエディータはすぐにも放校になっていたでしょう。老監督教区長は私たちすべての両親に宛てて、すぐにも手紙を出す予定にしています。私たちはすでに、誰が家から最もひどい手紙を受け取るか賭けをしています。でも私は、この若い人たちに対してひどい不安を感じています。いいですか、もし彼女たちが私をここから追い出そうと思えば、いとも簡単にできることなのです。——つまり、大きな出来事が起こった事情はこうなのです。クラス長が先週の日曜日不在でした。そのため副クラス長のエディータがクラス長の代わりを務めるよう言われています。私たちは彼女を説得して、晩には完全に自由にすることができなくなっていました。係の女が帰って行くと、私たちは起き上がりました。マリア・ベッセラーがハーモニカを吹き、私たちは歌い、そして踊ったのです。それから、大きなホールの後ろに屋根裏部屋に通じるドアがあつて、私たちはそこを探検したくなったのです。エディータがランプをもって先頭を歩きました。長い黒髪の彼女は、あなたの想像を超えるほどの美人です。——最初、彼女はこの宗派別女学校の謎について語ってくれました。私たちは心を決めて、かつてこの学校にいた子供たちの干からびた血痕と死体を見付けに行くことにしました。しかし、数人の者は恐れをなして、

再びベッドにもぐり込んでしまいました。

その後私たちは、古いガラクタヤクモの巢に覆われた非常に古い屋根裏部屋に忍び込んだのです。至るところには月の光が差し込んでいました。それから、エディータと私は梯子を登って塔へ上がり、天窓から外に出て、礼拝堂の屋根を滑り降りたのです。他の仲間たちは、後になってそのことを根掘り葉掘り聞かれた時、愚かにもその一部始終をすべて喋ってしまったのです。

その後、私たちはランプを床の上に置き、その周りをインディアン踊りをしてぐるぐる回りました。私たちは、翌日、身体が全く動かなくなるほどびよんびよん飛びまわったのです。そして最後に、私たちはさらに廊下に走り出て、第四共同寝室の前でセレナーデを歌い、眠っている者たちのベッドに向かって長靴を投げ付けたのです。

その人たちが私たちを言いつけたのです。——言いつけるなんて、本当にひどいことではないですか。老監督教区長自らがクラスにやって来ましたが、その時の彼女の激しい怒りようといったら、今まで誰も見たことがないものでした。ある時彼女は、「罪はあなたたちのクラスでは侵食性の膿みのようなものです」と言いましたが、その時私は、ぷつと噴き出してしまったのです。すると彼女は、私をめぐってやってきて、あなたがこの事件の煽動者であることはよく分かっています、あなたが他の人たちを唆して、ナイトウエアのまま廊下に出させ、規則違反をさせたのでしよう、と私を罵ったのです。

私たちの学校では相変わらず、大きな騒ぎがあります。というのも、絶えず新しい破廉恥なことが露見するからです。私たちのことを言いつけたあの第四共同寝室からも起こりました。しかし、実際になにが起こったのか詳しく探り当てることは困難です。それらはすべて、監督教区長の部屋の中で協議されるからです。監督教区長は今回の出来事で、クラス長を解任し、みんなを別の共同寝室に割り振りました。

ああ、やっとクリスマスにはまた会えますね。その時、あなたに話したいことが他にもたくさんありますが、その時にはまたきつと、私は非常な不機嫌に陥っているかもしれませんね。

エレンより

フリッツ・Hはまだ学校にいますか。エディータと仲良くなってからもうずっと、私は彼のことに以前ほど夢中にならなくなりました。ここでは誰も、決して男の子に夢中になるなんてことはありません。仲の良い友を持たない人もそうです。牧師を熱烈に崇拜するのです。ではお元気で。

エレンより

元日に、エレンは故郷の教会に行き、子供の頃のように神の御足に跪いて燃えるような改心の誓いを捧げた。両親の怒りが激しい嵐のように彼女にふりかかり荒れ狂っていた。父は生真面目に彼女と長く話し合った。「あの女学校を追い出されたら、おまえは一体これからどうするつもりだ。これからもずっとこんな状態が続くのか。」

自分がこれからどうなるのか、彼女自身も不安になっていた。これから自分を変え、自分をもっと抑制させていけば、まだ確かに遅くはなからう、とも彼女は思った。

だが彼女には、完全にそうしていく自信があるわけでもなかった。再び寄宿舎に戻ると、この思いは彼女の中でさらに強いものになった。最初の数週間は本当に良い状態が続いた。その頃、若い仲間たちの間では堅信のことが大きな話題となっていた。牧師は彼女たちに、最初、キリスト教の基盤と本質について語り始めたが、その後、個々の戒律とそれと生活との関係や、あらゆる脅迫と約束の中に存在する重大な厳肅さのすべてについて、そして神の怒りや神の恩寵、神聖な精神に反する罪、十分な意識を持って恩寵を取り逃がす信者の罪、どんな許しも値しないとてつもなく悪い罪について話した。彼女たちは不安な気持ちに満たされて彼の言葉の一言一言に耳を傾けていたが、みんな同じように、もし自分がそんな罪を犯してしまったらどうしたらいいのだろうと考えながら、魂の奥深くまで身を震わすのだった。

その後しばらくするとやっと、彼女たちは神の祭壇のそばに歩み寄るように言われた。その祭壇の前には、品位を汚して飲み食いする者は自分自身のために飲み食いする者だ、という言葉が掲げてあった。敬虔な気持ちで机付きの椅子に腰を下ろしていた若い十二人の仲間たち全員の中の心を、戦慄のようなものが走った。そして同時に、彼女たちの深い心の奥底まで見詰めることができ、罪とはなにかを知っているこの牧師の前で罪深く打ちひしがれて立っている彼女たちの心の中には、逞しい刺激のようなものが存在しているようだった。

エレンにとってこの牧師は、この教師たちのうちで信頼できる唯一の人物だった。彼はなにをなすべきかよく知っていて、彼女は授業後もしばしば彼に従って大きなホールへ行き、彼の訓戒を受けた。彼は監督教区長のように叱ることもなく、彼女を恥じ入らせたり屈辱的な思いにさせることもなかった。いつも適切な言葉を選び、理解ある微笑をたたえていた。そのことに応えるように、エレンもまた、彼の授業ではいつも気持ちを集中し、非常に長い詩篇でさえも暗記し、彼を喜ばした。

エレンは相変わらずエディータと一緒にいることが多く、彼女を熱愛し、言うに言われぬ敬愛の気持ちを捧げていた。食事や授業の際も、夜ベットに入っても、彼女の心はエディータに対する崇拜の念で、そして頭は、詩句のことで一杯だった。いつもエレンは、この友人を歌に詠むための韻を踏んだ新しい詩句を探し集めていた。エディータは非常に美しく、大変優秀で、他人と比べることができないような女性だった。晩に、共同寝室で髪を解くと、彼女の髪はいつも、あたかも厚いマントのように、彼女を包み隠すように覆った。黒い重々しい目の上には眉が、二本の太く黒々とした線のように伸び、手足は、彼女が他の人間のようにそれらを駆使することなどできないのではと誰もが思うくらいに大変小さく愛らしかった。

老監督教区長は、責任者としてたくさんの困難な時を送らねばならなかった。エレンとエディータが非常に親しい仲になって以来、名誉あるこの古い建物には、悪魔のようなものがあちこち集団的にはびこっている様子だった。堅信についての授業の際には、その悩める良心に関しての講義だったが、第一クラスの者たちみんなが羽目を外して騒ぎ出し、教師たちのベッ



ドには塩がばら撒かれ、彼女たちは一晚中眠ることができなかった。また、誰も自分がしたことだとは言わなかったが、牧師見習いのコートのボタンがすべて切り取られたり、帽子の上から下まで全体にわたってチョークが塗られたりした。或いはまた、エレンとエディータはインクを飲んだり、非常に高い柵から飛び下りたりすることができか賭けをした。そして実際二人は、インクを飲み、柵からタイルの上に飛び下りたのだった。それを見て、他の者たちは驚いて真つ青になった。

二月の初め、その日はエディータの誕生日だった。エレンは彼女のために自分の詩を集め、それを活字にしてきれいに装丁を施し、彼女に贈ることをしばらく夢見ていた。しかし結局、それらの詩はエレンには十分良いものと思われず、むしろ一冊詩集を買って贈る方が良かったろうと、彼女は考えた。詩集の作者が誰であろうとそんなことは構わなかった。ただその中にたくさんさんの愛の詩があれば良かった。しかし、詩集を買うことは、そんなに簡単ではなかった。お小遣いも罰則のため定期的に差し引かれていたし、買い物はすべて責任者である監督教区長の手によって行われていたのだった。

しかし、エレンはこの問題について長く頭を悩まさなかった。彼女は、お金の貸し借りが厳しく禁じられていたが、小銭を借り集め、最近この学校に新しくやってきた一人の新入りを説き伏せて、その者の名前で詩集を手に入れたのだった。その詩集には、四百五十の詩が載せられていた。

その晩の間に、詩集はエディータの枕の下に入れられた。エディータが翌朝、そこに詩集があるのを見つけた時のことを考えると、エレンはひどく幸せな気持ちになるのだった。

エレンは最初の授業の前に本を探していると、突然二つの手が彼女を抱き締めた。すると、彼女の心の中を火のような熱いものが流れた。エディータは彼女の口にキスをして言った。「詩集、どうも有り難う、エレン。私、嬉しかったわ。」

二人はお互いに離れることができず、正午の労働の時間にも姿を見せなかった。たまたまクラス担当の教師が教室に入ってきて来て、二人のことを尋ねた。しかし誰も二人を見た者はなかった。その教師は興奮して学校中を尋ねて探し回り、ああ、困ったわ、二人はどこに行っただのかしら、本当に、彼女たちはなんでもしでかすのね、と言った。そこでクラス全員で一緒

に二人を探すことになり、文字通り大騒ぎとなった。結局、二人は二階の若い者たちの共同寝室にいたが、その一番奥にある二つのベッドに横になって、詩を読み合っていた。その教師が二人を見付けて蒼ざめた顔をして怒っても、二人は少しも起き上がろうとする様子も見せず、半ば笑いこけていた。その後二人は、教室へ連れ降ろされたが、読んでいた詩集はその教師に取り上げられた。教師はその詩集を持って、監督教区長のところへ行った。老監督教区長は事件の全体の報告を受けながら、この詩集を念入りに調べ、最初の頁にエレンの手による長い献呈の詩句が書かれているのを見て、昨日、別の人 が注文したばかりの本にどうしてエレンがこんな詩を書くことができるのだろう、と訝しがった。その後、次々に尋問が行われたが、エレンだけは呼び出されなかった。

その代わり、責任者である老監督教区長自らが食後にクラスにやって来て、他のみんなの前でエレンをひどく打ちのめした。老監督教区長は、午後に集会に出掛けるつもりで盛装していた。そのため、長い絹の引き裾はいかにも怒った黒蛇のように、彼女の後ろをカサカサと音を立てながら付き従っていた。

エレンは両手をエプロン服の胸当ての下に入れて立ち、老監督教区長の目を真つすぐに見た。彼女は自分が恐れていないことを見せようとしたが、老監督教区長はシユシユという音を立てながら厳しい言葉を、諭すように彼女に話し掛けた。

「エレン・オレスチエルネ、あなたとはこれからはもう、面と向かって話すのは止めます。だってあなたは、もうこうした配慮にも値しないわ。あなたのことでは、もう一年近くも我慢を強いられました。ここに来た最初の頃から、あなたはあらゆる規律や秩序に逆らってきたし、今日もまた残念なことに、完全にあなたの支配の下にあるエディータと一緒に笑いながらすべての規則を無視したのです。そのことについて、今縷々話すつもりはありませんが、ただ次のことだけはあなたに言うっておくことにします。私はこれまで少なくともずつと、あなたのことを誠実だと見なしてきました。でも、なんとこの不法な手段を使って、あなたがこんな本を手に入れたかを知った今、もうそう思うのは止めになります。今はもう、あなた自身が卑しい虚偽にさえも尻込みしない人間だということが分かりました。あなたは名望のある良家のお嬢さんで——堅信

を受けるのです。——そして最後に、もう一度言っておきます。あなたの進もうとしている道は墮落した道です。即刻止めることです。よく考えて、遅くならないようにしなさい。そうしないとあなたはいつか、私の言葉を思い出して、ひどく後悔することになるでしょう。」

その後、老監督教区長は他の者たちの方を向いて、次のように言った。「エレン・オレスチエルネは卑しい虚偽の罪を犯しました。——彼女は同級生の名前を使って、決して自分では買うことのできないような本を手に入れたのです。そして、二人の者を唆してその本を買うためのお金を借り、自分の罪を少なくとも瞬間的に覆い隠そうとしたのです。あなたがたは今後、彼女を不真面目な人間だと考えるべきです。今もまだ、彼女と付き合っている人みんなに、私は警告します。」

こう言つて、老監督教区長は、黒の絹の引き裾をカサカサ音を立てながら引きずつて、部屋を出て行つた。

エレンは三日間、拘禁された。彼女は黄昏の塔の部屋の中で、エディータに捧げる長い詩を作り、自分の運命が決定されるのを待った。次の日曜日にみんなが並んで監督教区長のところで成績証明書の呈示を受けた時、彼女は憎憎しげな声で言つた。

「エレン・オレスチエルネ、あなたのご両親にはあの事件について報告しておきました。でも、あなたは復活祭まではここに留まつてよろしい。堅信式の前にあなたを追い出して、あなたのご両親に恥ずかしい思いをさせたくないからです。」

放校という冷たく厳しい現実を突然目の前に突き付けられて、エレンはひどい恐れを感じるとともに、両親のことを考えた。彼女は悪い夢の中にでもいるように感じて、その部屋を出た。他の者たちのそばを通り過ぎ、何も見ることなく階段を上がり、二階の廊下の突き当たりにある窓の前で立ち止まり、その窓ガラスに顔を押し付けた。彼女は家に帰されることに死にも似た不安を感じた。——そのことは今日、彼女の様子からして誰の目にも明らかなことだったが、その死の不安が押し潰すような重荷となつて、彼女の上に四方八方からのしかかっていたことまでは誰も想像できなかつた。しかししばらくすると彼女には、かび臭い牢獄のような空気に満ちているこの重苦しい教室から出て家に帰るといふことが、なにか明るく

喜ばしいことのように急に輝き始めたのだった。城館とか、晩にはその窓のそばの側壁のところでは子供たちが長々とお喋りをする陽の当たる大きな部屋とか、ライラックの強い薫りのする夏の庭、デートレフのこと、そして兄弟姉妹みんなのこと、そうした故郷のことが幻影となって思い出され、彼女は郷愁に啜り泣いた。確かに今や彼女は、どんなに悪いことが起ころうとも家に帰ることを、まさしくそうすることを切に望むようになっていた。

月曜日の朝、エレンはまだ半ば寝ぼけ顔で下へ降りた。エレンの棚の前で、ブルームナー嬢がターバンのような水玉模様の帽子を被って、衣類などの片付けをしていた。

「何をしているの。」

「馬鹿なことを聞かないで——あなたの棚は、他の者たちがあなたと必要以上に接することがないように、もう二階の階段のところに入れてあるわ。あなたのように嘘をついたり他人を騙したりする人は、それ相当に扱われるということをよく覚悟しておくことね。」

エレンは笑って、怒りを押し殺したが、顔は高慢になっていた。その後彼女は、自分の棚のドアの内側にひどく大きな文字で次のように書いた。

私は決して屈服しなかったし、打ちのめされても誇らしさを失わなかった。一八八六年二月十七日。

このために、エレンはまた一日、拘禁された。そして今や、すべてが予定通り進んでいった。彼女は追放され、まだ彼女と付き合いのあった他の誰もが彼女にそっけなくした。しかし彼女は、こうした挑戦に応じるように、事ある毎にできるだけひどく無作法な態度を取り、笑いながら罰を受け入れ、さらには、邪悪な態度を取ることによって、自分がそうした罰に屈していないことを示そうとした。共同寝室ではほとんど毎日、騒ぎが起きた。水を運ぶ時、彼女は頭の上にブリキの洗面器を乗せてバランスを取り、それに触れないでも運ぶことができると言い張った。また、口をすすぐ時、メロディを付けてうがいをし、それを自分は全く意識してやっているわけではないので止めることはできないと言った。さらに、みんながベッ

ドに入っている夜半中も、野生の動物の遠吠えのように長く伸ばした声で泣いたので、誰も決して眠ることができなかった。「エレン、静かにしなさい」と、監督する立場にあるクラス長が叫んだ。

「ごめんなさい。悲しくて、泣くことを止めることができないの」と言つて、彼女はさらに、吠えるように泣いた。他の者たちは彼女のそうした声にひどく笑い転げた。クラス長が忠告してもなんの効果もなかったが、彼女はなんでもエレンに止めるように訴え続けた。エレンは今や、そんなことなど全く意に帰さず、文字通り反抗に酔いしれたような日々を送っていた。誰もが自分の行為に構わなくなると、彼女は自分から何度も監督教区長のところへ行つて、自分を告発するのだった。

「私が昨日の授業中笑つていたのを、コリンズさんはあなたに報告することを忘れていたようです。」

監督教区長は取り乱したように怒つて、ついに彼女に、教室に入ることも禁じた。時折、エレンはひどく不幸だとも感じた。彼女は実際今や、全く孤独だった。エディータさえも、もはやエレンに少しも関わろうとしなかったし、益々エレンとの接触を避けるようになり、そのうえ、エレンが好きになれないかつての女友だちと付き合うようになっていた。エディータがこの女友だちと一緒にいるのを見ると、エレンはひそかに拳を握り締めた。彼女の思いは益々絶望的になった。外では嵐がひゅうひゅうと吠え、フクロウが夜の暗闇の中で鳴いていた。——みんな眠っていた。ただ彼女一人だけが心を引き裂かれ、激情や裏切られた愛で心の中は煮えたぎり、眠れず目覚めていた。時折、反逆の聲が彼女の耳に聞こえてくることがあった。「こんな屈辱を、これからどれだけ耐え続けなければならないのか。——こんな束縛を、まだどれだけ我慢すればいいのか。」「私の血は荒々しく、また素早く身体の中を回っている。——そして脈は、いつも激しく脈打っている。——ああ、私の誇りや自己感情が頭をもたげてくる。——私が立ち上がることに、君たちはなんと多くの期待を掛けていることだろう。」

復活祭の少し前、その年の最後の成績証明書配布の時がやってきた。それは、いつもの厳肅な公的な式典であり、町の人々の名士たちが出席し、監督教区長がスピーチをした。今回は五十人の子供の上に雷雨のような激しい怒りが落ち、その子供たちの多くは顔を上げることさえできなかった。

監督教区長のスピーチは次のようだった。職務に就いて三十二年、今年ほどの年を体験したことはありません。——反抗精神が私たちの学校にも侵入して来たのです——。残念ですが、私たちは不満分子の存在を知るのが本当に遅すぎました。軽率さと背信行為によって、この者たちはひどい出来事をしてかしたのです。——その後、彼女の声は益々大きく、責め立てるように高まった。——こうした不満分子は情け容赦なく、取り除かれねばなりません。——この者たちは諸悪の根源ですし、素早い干渉によってのみ排除されるのです。

エレンは、自分の名前が挙げられなかったが、多くの視線が自分に向けられているように思った。しかし彼女は、目を伏せようともせず、ほとんど勝利のようなものを感じていた。「確かに、あなたたちは私を意のままにすることはできなかつた。」

その晩、彼女は牧師に呼ばれた。彼は長い間、彼女を真剣に見詰めて、次のように言った。「いいですか、エレン、私を恐れなくてもよい。あなたの心の中がどのようであるか、そしてこれから、あなたがそれを変えようとする意図を持っていることが私には分かります。天国では、九十九の正義の人の前で懺悔する一人の罪人に対しても、喜びが与えられるのです、その言葉を考えなさい。あなたはとりわけ、悪い反抗精神やあらゆる子供っぽい反抗心を捨てるべきです。そんな心をもって世の中を渡っていくことはできません、エレン。——いろんなことがあつたけれども、私はあなたを信頼しています。あなたが根本的に、悪い人間でないことを私は知っています。あなたは自分自身だけでなく、他の人々までも困らせました。でも、あなたは私の最良の生徒の一人であつたし、これからも私の最良の人間の一人になるように希望しています。私自身も、あなたのお母さんと話すつもりにしています。おそらくお母さんは、あなたに不満を言いたい理由をいくつも持っているでしょうから。」——そう言って、牧師はエレンに手を差し出した。すると、彼女の顔を大粒の涙が伝い落ちた。

翌日、母がやって来た時、エレンは彼女の言いなりになった。事柄は、彼女が思っていたよりもより良く進んだ。ママは、必ずしも監督教区長と完全に意見が一致したようではなかったが、牧師とたくさんの話をして、びっくりするほど穏やかに

なっていた。

懺悔の前、堅信式を受けるようとする者たちはみんな、互いに心を鎮め合って教師たちのところへ行き、世界のすべてとの完全なる平和を願って晩餐を取った。——エレンはこの慣例行事に参加しなかった。自分自身や神と十分に意志が通じている時に、どうして許しを求めることが必要であろうか、と彼女は考えたのだった。晩餐の後、彼女たちはみんな、一人ずつ監督教区長の部屋に入って、そこでも許しの言葉をいくつか吹き、額にキスを受け、あなたは愛すべき生徒でした、安らかでありますように、という言葉を受けたのだった。

エレンが部屋に入っていくと、老監督教区長と十五歳のこの少女は、しばらく互いにひどい反感を見せながら向き合っていた。

「エレン・オレスチエルネ、あなたは私になにも言わないの。」

「言いません。」

その後自分が話したいくつかの言葉を、エレンはもはやその通りには思い出せなかった。監督教区長は彼女に、一種の呪いのような言葉を浴びせ掛け、貴族階級特有のよく手入れの行き届いた人差し指でもって命令するようにドアの方を指し示した。

その後彼女は、廊下で若い女の子たちがあちこち行き交うのに出くわした。彼女たちの多くは生真面目な会話を交わしていたが、明日の服装のことや、髪をどのようにするかをひどく心配そうに話している者も何人かいた。監督教区長と会ったばかりなのに、エレンは穏やかで楽しい気分だった。母との再会はなんとか終わり、エディータとは長い話し合いの末、再び仲直りをした。

「ねえ、私は最近、いろいろ配慮しなければならなかったのよ。あなたも知っているように、私は子供の時からここにいるわ。だから、老監督教区長はいわば私にとって母親代わりなの。彼女はいつもとても思いやりがあったわ。彼女はともか

く私に、あなたと付き合わないように言ったの。でも、そうすることは私には決してやさしいことではなかったわ。でもあなたは、そんなこと自分には全く関係ないといったように、いつも振る舞っていたわね。」

「おお、違うわ、そんなこと決してないわ。」二人は抱き合った。エレンはこのうえなく幸せだった。

「ねえ、私たち、たびたび手紙を出し合いましたよ。あなたが家に帰ってからの様子を知らせてよ。」

「分かったわ、でも私、ひとつお願いがあるの——私にあなたの巻き毛を一本ちょうだい。」

エレンは自分で彼女の巻き毛を一本切り取った。エレンはこれまで、エディータの投げ捨てた鋼鉄ペンやこっそり切り取った膝掛けの房や、古いノートなどのあらゆるものを集めていたが、その巻き毛を、彼女はいつも服の下に着けていたロケットの中に入れた。

復活祭の鐘が鳴り、堅信を受ける者たちは、長い引き裾の白装束をつけて高い石の階段を降り、暗く湿っぽくて冷たいホールを通過して、礼拝堂へ入って行った。

エレンは牧師の前に膝まずくと、彼の声は自分にだけ聞こえる全く特別な響きのように、つまり、二人の間の厳かな秘密のように聞こえた。——彼女の心は真面目さで一杯になり、喜ばしい朝のようなすがすがしい感情に波打った。この日を期して、彼女は新しい人生を始めたいと考えていた。そう思うと、彼女は大変軽やかな明るい気持ちになった。——それはちょうど、失敗をやらかしてはずたずたになった日の翌朝に目を覚まして、昨日うまく行かなかったことを、今日はすべてうまくやろうとする時のような気分だった。

翌日、エレンは母に連れられて旅立った。階段のところに監督教区長が立っていて、冷たく手を差し出したので、エレンはそれにキスをした。——その時、彼女は、ああ、この階段とも、彫りの深い目をした厳しくてぴかぴかしたこの顔とも、また、手に奴隷のようにキスをすることもお別れだなあ、と思った。

その後、あなたのことは決して忘れないという、エディータの約束を心に抱きながら、エレンは春の宵にネフェルスフー



スの兄弟姉妹のところへ帰って行った。それは、エレンにとってなにか物悲しくも幸福なことのように思われた。

マリアンネ・オレスチエルネは父の部屋にいて、古い頑丈な書き物机のほこりを払っていた。彼女は用心深く、また優しく、暗褐色や紫色のビロードの額縁に入った色褪せた家族の写真を再び元のところに置き、さらに注意して、そのそばに書類と、ペン軸と鉛筆の入った長いペン皿を置いた。それぞれ、再び元のところに置き直され、部屋は快適になった。彼女はそれらすべてを、どれにも意味と生命があるように、愛情と長年の習慣をもって扱ったのだった。

男爵はソファアの前の丸いセンターテーブルのそばに腰を下ろし、大きなコペンハーゲン製のカップで朝のコーヒーを飲んでいた。こうした朝のすべての時間は、中断されたり邪魔されてはならない神聖な事柄のように進んでいた。マリアンネは父の方を見た。父は新聞に目を通し、再び、それを置いた。彼女にとって父は、一日の中で、そして仕事において関わるすべてのうちで最良で最愛の人だった。

「パパ」と、彼女はいくらか低い声で言った。

「なんだい、マリアンネ。」

「パパ、今日はエレンの誕生日よ。——少なくとも、エレンがプレゼントをもらうちよつとの間だけでも、向こうへ行つてやりませんか。」

彼の口のまわりに不機嫌な動きが走った。彼は肘掛け椅子を押しつけて、部屋の中を歩いた。「私はエレンが私のところへ来るのを待っているのだ。」

「そんな勇氣、エレンにはありませんわ」とマリアンネは言った。

「馬鹿な、エレンに、勇氣がないなんて、これまで思ったこともない。」

「パパ、あなたもエレンの氣持ちを和らげてやらなかったし、エレンが帰って来てから、あなたは彼女と一言も話さなかつ

た。そんなことで、彼女は萎縮しているのです。そしてママは——。」

「今はそうするのがより良いことだと思ったのだがね。——私は、そんなことにかかわる気持ちを全くなくしてしまつたよ。」

「いいえ、お父さん、それは良くないと思います。私自身も、エレンとママの関係がどれだけ難しいものであるかを知っています。そしてエレンはまだ若くて、熟慮することができないのです。——私たちエレン以外のみんなは、あなたと仲良くしています。おそらくエレンも、私たちみんなと同じように、しっかりと支えてくれる手を、そして愛を必要としているはずです。」

父は益々せかせかと歩いた。マリアンネはその歩みのひとつひとつから、彼が不機嫌なのを感じた。

「私には、エレンがなにを望み、なにを必要としているか分からない。彼女を理解するのは難しい。いったいどのような気持ちで帰ってきたのか。——もはやたくさん勉強する必要もなく、デートレフと馬鹿げた幼いいたずらが続けることができる、と喜び勇んで帰ってきたのか。破廉恥なことをしたと思つている様子もないし、私たちの顔に泥を塗るようなことをたくさんしでかして申し訳ないといった、彼女からの言葉もない。かつて彼女をなにも言わないで外に出したのは、彼女がママとうまくいきそうにないと思つて、彼女を助けるためだった。しかし彼女は、自分のためになされるすべてのことを敵意や悪意とみなして、盲滅法に分別もなく反抗したのだ。——そのように、エレンに言ってくれ、そんなことをせひ、彼女と話してくれ。そして、もし彼女が自分からやって来ると言うのなら、それは良いことだ。」

しかし、エレンはやって来なかった。姉のあらゆる思いに対するエレンの返答は、「なにをしてもどうしようもない」というものだった。——こうして、その日は憂鬱な誕生日となった。家族の者たちが食後に、庭に通じるドアの前に腰を下ろしている、エレンはあの牧草地に向かつて走り出した。そこでなにをしようとするのだろうか、とみんなは考えた。彼女は、自分が道から外れた無駄な人間であると感じていた。そう思つて、彼女は草むらに身体を投げ出して泣いた。——確かに彼

女は故郷を再び取り戻したのだったが、その他はすべて以前と同じだった。毎日が闘いであり、苦しみだった。寄宿舎での不幸な事件を体験しただけに、彼女は益々絶望的になっていて、行き詰まりを感じていた。エレンの後を追って、マリアンネとデートレフが牧草地に駆けて来た。マリアンネは、エレンのためににかお祝いをしようと思ひ、三人で彼女の好きなオルループへ行こうと考えていた。——そこは郊外の海辺の小さな村だった。

エレンは姉のマリアンネをとて尊敬していた。——姉は青年期ずっと家で過ごし、決して不満も言わず、いつも規則正しく静かな陽気さを湛えていた。三人は両親のことや、あらゆることを話題にした。

「あなたは本当に、かなり多くのことを我慢しているに違いないわ。できそうなことでも、すべて諦めているでしょう」とエレンは言った。

「でも、そんなこと、大抵は大して重要なことでもないわ。例えば、パパにある本を読むのを禁じられた場合だって、それにはきつとわけがあるはずだわ。楽しむことのできる素晴らしいことが他にも相変わらず大変たくさんあるのだから、そんなこと全然考えないわ。」

「分かったわ。でも、ママが私のすることをなんでも許さないのは尤もな理由があるからだ、以前から思っていたの。ママが禁じるのはただ禁じたいからだけか、或いは、私の喜ぶすべてが彼女には無駄なことに思われるからよ。怠け者で、なにもしようとしな、とママは私のことを言っているわ。でも、どうしてママは私に絵を描くのを許さないのかしら。絵を描くことは私のただひとつの願いで唯一の楽しみなのに。それが可能であれば、私は喜んで一日中でも働くつもりよ。でもママは、私がスケッチブックを持っていると、そんなつまらない下手な絵を描くのなんか止めなさい、そんなのなんの得にもならないわ、と言うわ。」

マリアンネは肩をすくめた。「ママはともかく役に立つことだけしか考えないわ。私がたくさん本を読むのも好まないわ。だから私はあなたに、パパを頼りにするように何度も勧めているの。パパは、あなたがその気になればすぐにもあなたの助

けになってくれるわ。いつも私は、あなたたち小さな者たちは実際、パパのことを全然分かっていない、と思っているの。」

「パパは私たちのことをあまり気に掛けていないわ。」

「あなたたちが望めば、パパは進んでそうしてくれるわ。私が言ったように、パパはあなたがやって来るのを待っているのよ。」

「そんなこと、私にはできないわ。決してできないわ。なんのために、私はパパに許しを請わなければならないの。あの卑劣で獣みたいな監督教区長に私が背いたことでの。今日だって、あの女の首をひねり折ってやりたいくらいだよ。」

「僕もだ」と、デートレフは憤懣やる方ないといったふうに、二人の間に割り込んできた。彼も監督教区長を嫌っていた。彼らの前には村が広がり、藁葺き屋根と先の丸い低い教会の塔があった。彼らはヒースの丘を越えて、海の方へ駆け降りた。マリアンネはパパの書き物机に置くための花を摘んだ。それから彼らは、大きな燃えている玉のような太陽がゆっくりと海の中へ落ちて行くのを眺めながら、海辺の大きな石の上に腰を下ろした。空は遠くまで赤く燃え、海は赤く、ヒースの丘は赤々と輝いていた。次第に辺りは、再びすべての明るさをなくし、今や急速に暗くなっていった。堤防の上にいる何人かの姿は、黒いシルエットのようだった。

「この景色を絵に描きたいなあ」とエレンは言った。「絵を描くことができれば、なににも増して素晴らしいことだよ。」

デートレフは笑って言った。「相変わらずあの鳥籠と同じだね、エレン。君は以前と少しも変わらないね。」

「そうね、でも、いつかぜひ、今の鳥籠にもう一度挑戦して見せるわ。そう期待してもらっていいわ。」

それから彼らは、早足で堤防沿いに進みながら、八年前の大きな暴風による高潮のことを話し合った。今、その堤防は長く真つすぐに伸びているが、あの当時、堤防はほとんど折れたも同然で、ほんの一メートルの長さのものばかりで繋がっていた。そこにとてつもない大波が押し寄せ、勇気を出して外に飛び出した者たちを紙屑のように吹き飛ばしたのだった。――それから彼らは、夕日に赤く輝いていた小さな庭のある赤い屋根の堤防見張り小屋のところに来て来た。そこはボート

置き小屋であり、古い船が修理のために入れられていたドックであった。港のすぐそばで、彼らは多くの散歩をする人たちと出会った。夕方いつもこの辺りを散歩する人たちであり、みんなこの小さな町のなじみの顔だった。三人は何度となく挨拶を交わし、あちこちで立ち止まって、一言二言話し掛けた。そして彼らは、道を曲がって細い港通りに入り、広場を横切つて市役所のアーチの下を曲がり、暗いカスターニエンの並木道を通つて、やっと城館にたどり着くことができた。

数日後、エレンが町へ行っている時、母は彼女の部屋に上がった。「一人でいる時、エレンがいつもなにをしているのかわ知っておきたい」と母は考えたのだった。——エレンはたまたま、部屋を片付けるのを忘れていて、部屋の入り口辺りには花やエディータを描いた三枚の絵が立てかけてあり、机の上にはこの女友だちに宛てた、辛い厭世観や自分の不幸な運命を限りなく嘆いた長い書きかけの手紙があった。そしてその横には、厚い革製の自作の詩集があったが、これは、これまで母が決して見たことのないものだった。母はその詩集を手にとって居間に降り、眼鏡をかけて午後ずっとそれを読んだ。エレンが家に帰つて来た時、ママはエレンの足元にその詩集を投げ付けて言った。「おまえには私のビンタが必要ね。なんという馬鹿げたことをしているの。そんなことを書きなぐつて恥ずかしくないのかい。すぐ、止めなさい。いいね。——エディータに宛てた手紙でおまえの書いていること——それは、あらゆる気違いじみたおまえの妄想が認められない場合、ひどい不正でもなんでもしてやる、ということと言っているのね。これからは、おまえの手紙は全部読むことにします。いいですね、覚えておきなさい。」

エレンは最初、硬直したように立ちすくんだまま、ママはどうしてそんなひどいことを言つて、私の最も奥深い心の中の秘密までも引つ掻き回そうとするのだろうか、と思つた。——そんなことをされて、確かにエレンは恥ずかしく思つた。——しかし同時に彼女は、自分の魂の覆いがすべて引き剥がされてしまったように感じ、言いようのない怒りに襲われた。——その後彼女は、心の中に鬱積していた憤懣のすべてを母の顔をめがけて吐き出した。

「私は、どうしたら良いか分かりません。でも、もうあなたのそばには、この地獄のようなところにはいたくありません。もう我慢できません。すぐに出て行くか、死んでしまいたい。」

一瞬、部屋の中は全く静かになった。——エレンは腕を高く上げて、威嚇し防御するような姿勢を取った。「たたかないで、ママ。」母は彼女をぶとうとしたのだった。

エレンは再び、家を飛び出したが、父が彼女を呼び止め、長い間、彼女と話し合った。そして、彼女の激しい反抗心は涙とともに溶けていった。——パパがこんなに優しく、多くのことを理解して助けてくれるなんて、彼女はこれまで決して信じることができなかった。

そんなことがあつて、彼女はかなり長い期間の予定で、叔母のヘルミーネ・オレスチエルネのところに行くことになった。男爵である父の末の妹に当たるこの叔母は、庭付きの自分の家で一人暮らしをしていて、苦境にあるエレンがやって来るのを心から喜んだ。彼女のところで、エレンは自由に、苦しみや心に溢れる願いのすべてを吐き出すことができた。最初の晩すでに、家族の写真の置いてある古風な家具の揃っている快い居間で、叔母のヘルミーネに、彼女は故郷の家や寄宿者でのいろいろな体験を語ったのだった。

叔母は注意深く耳を傾けた。「そうね、あなたのママはとても気難しいからね。——私も時折、彼女が理解できなくなることがあるわ。あなたももう、そんな話ができるほど大きくなったのね。ともかく私のところでは、実際に楽しく、なにも気にしないで大いに自由にやってね。この地には女流画家がいるわ。あなたにその気が強くあるなら、彼女のところでレッスンを受けることだってできるわ。」

おお、その気があるかって、勿論、と思うとすぐにも、エレンは伯母の首に抱き着いた。あやうく、ランプやいろんなもの置いてあるテーブルクロスが引き落されそうになった。

「そして、もしあなたに才能があると認められれば、あなたはおそらく、家でも絵に関わることができるとでしょうし、そ

うすれば少なくとも、あなたも仕事を持って楽しく生活することができるとでしょう。」

エレンはアトリエ用に部屋を与えられ、最初の日からすぐにも貪欲に、そして健全で溢れるばかりの若々しい力を持って、絵に没頭した。その力は、これまではほとんど無駄なものとして押さえられていたが、目標を、それも、最も熱望する目標を持つようになった今、突然、彼女の中で燃え上がって来たのだった。彼女は叔母と一緒に出掛けたり、様々な楽しみに加わったりしたが、彼女が最も好んだのは、夏の長い日々ずっと、イーゼルの前に立っていたり、スケッチブックを持って外をぶらぶら歩いたりすることだった。絵の先生は彼女の絵を少々おぼおぼと、遠慮がちに賛美した。パリやミュンヘンにいたことのあるこの女流画家は、エレンのなにも知らない、全く違った世界の女性だったが、エレンは今まで体験したことのないあらゆることを、驚くほどの熱心さで吸収したのだった。

彼女は自分の途方もない無知さを恥じた。——彼女は今まで決して本物の絵など見たことがなかったし、生きたモデルを使って絵を描くことなど全く知らなかった。そのため、彼女は大変愚かな質問をして、しばしばフーニウス先生を笑わした。エレンは、この先生が視野の狭いこせこせした人々の中をどんなふうに生き、もっぱら自分の絵のためにどのよう生きてきたのかを知って、ただ絵のためにだけ生きていきたいということがあることなのかが分かり始めたように思った。先生のレッスンは自分の番になると、彼女は恐れおののきながらも先生の後ろに立って、その一筆一筆を追った。そして、その先生の顔を前から見ていないその時、彼女は自分自身の希望を、つまり、絵に完全に没頭したいとか、様々な障害があるとしても、心底、この絵のためにだけ生きていきたいという希望を、先生に思い切って話すことができた。するとフーニウス先生は、あなたの前には本当にたくさんの障害が立ち塞がっていますね、と言った。エレンの家族関係を、彼女はよく知っていたのだった。彼女はまた、エレンに様々な幻滅についても話し、あなたはまだ若いし、どの初心者にもあるような大きな幻想を抱くことがあるだろうが、それも大抵は次第になくなっていくものです、と語った。しかし、そんな話を聞いても、エレンは強く圧迫を受けることもなく、それを信じようともしなかった。今こそ自分にとって、すべてを幸福の続く夢に変

える時期だと彼女は考えたのだった。一日一日が楽しい力に溢れた真面目な絵の勉強だった。暑い夏の夜でさえも、まともな疲れはやって来なかった。時折、エレンはそっと起き上がって、低い窓を飛び越えて、草地を走って庭園のそばを流れている川に駆け降り、ヘルミーネ叔母の小さなボートに揺られたり、叔母に自分のしていることが聞こえるのではと穏やかな危惧を感じながらも、流れの速く暗い水の中に潜ったりしたのだった。

十二月初め、母はエレンに、もう帰って来なさい、と手紙をよこした。叔母はエレンを帰すのを渋った。叔母は、エレンの熱心さに大きな喜びを感じ、彼女の不断の生き生きとした澁刺さを十分理解していたが、来年またやって来て、さらに勉強を続ければ良いだろう、と考えた。エレンは大きな二つのスケッチファイルを携えて、たくさんの溢れるばかりの計画と将来の夢を持って家に帰った。今や、彼女にとって世界は輝いていた。彼女はママと仲良くしようとして、できるだけ彼女の言うことに従い、静かに勉強を続け、みんなに自分が画家になることを納得させようとした。

クリスマスイヴに、家族みんなは、遅くまでネフェスフースの城館の食堂でパンチを飲んでいた。男爵は、いかにもそうすることを好むかのように、話しながらあちこち大きな足取りで歩いた。

「ここでのクリスマスも、これが最後だ」と、彼は突然言っ、テーブルのそばに立ち尽くした。

四人の兄弟姉妹は石のように硬直して腰を下ろし、彼をじっと見詰めた。

「本当よ、パパはこのネフェスフースの城館を売ったの」と、今度は母が目には涙を浮かべながら言った。「春には、私たちは出て行かなければならないの。」

彼らはみんな、黙っていた。父は彼らの前に立ち、身体をぴんと伸ばすようにして言った。「私たちが、ついにこの城館を出て行くことに幸いあれ。——君たち男の子は誰も農夫になろうとしないし、私たちはもう年を取り過ぎて、そんなことをするのも無理だ。ここにいても、全く無駄なんだ。」マリアンネは、子供たちの中で唯一人、すでにそのことを知ってい



た。他の子供たちは相変わらず、その突然の驚きから立ち直ることができないでいた。そんなことを彼らは考えることすらできなかったし、いつかそんなことがやって来て、ネフェスフースの城館がもはや自分たちのものでなくなるなど想像だにできなかった。子供たちの目には、両親は、時が経つても少しもその影響を見せない「若者」のように見えていたのだった。

——パパが隠居する、そのことは、子供たちが今や大きくなったことの証明だった。彼らはみんな、心の動揺を無理やり押さえようとした。感情的な言葉を吐くことは、とりわけ、多くの人の前でそうすることは、決してオレスチエルネ家に相応しい慣習ではなかった。しかしやはり、こんな大きな出来事のことになると、彼らの声の中には時折、どこか不確かな調子が混じることがあった。

「一体、どこへ引越すつもりなの」と、エーリックはいつものように落ち着き払って尋ねた。——彼はまもなく大学に行くことになっていたので、そのことはさほど関係のあることでもなかった。

「どこになるか、まだ分からないが、いずれにせよ、かなり大きな町にはなるね。」

「私たちは、みんなが一緒であればどこでもいいわね」とマリアンネが言った。——「確かに、どこだって、そここそ、私たちのネフェスフースよ。」

「ああ、君たちは違った環境の中に入って行くことを喜んでほしいものだ」と、父は再び言った。「長くここにいと、君たちは愚かになる。世界を見ることもないし、世界について何も知らなくなる。このネフェスフースのことだって、時が経てば、きつと忘れてしまふだろう。」

「どうしてそんなこと言うの、クリスチャン。」男爵夫人は子供たちと同じ気持ちだった。彼女は心底から、この古い城館に愛着を感じていたのだった。——二十四年間の生活——結婚生活のすべて——ここで生まれ大きくなった子供たち——ここで死んだ長男、彼女には思い出すことがたくさんあった。彼女は、夫がそんなに簡単な気持ちでここを離れようとしていることを、そして、この地から離れていくことをひとつの解放、ひとつの新しい生活の始まりと感じていることを、十分

には理解することができなかった。

マリアンネは手を組んで腰を下ろし、ただじっと父を見詰めていた。——彼はこの数年めつきり年を取り、額も上がり、皺も多くなっていた。しかし彼女には、今日の彼は大変若々しく見えた。彼の好みにも反して、境遇によって彼に強いられたこの窮屈な環境の中での生活、そこから逃げ出すことを以前から父が望んでいたことを、彼女は大変よく知っていたのだ。た。

開いているドアから、クリスマスの用意されている広間が見えた。いくつもの蠟燭の明かりはずっと前に燃え尽きていて、もみの木の上の銀色の飾りが暗闇の中に鈍く光っていた。

「君たちは、今日は全然笑わないな」と突然、男爵が言った。「君たちは一体どうしたのだい。」分別のある会話や真面目な読書の時にはいつも、とりわけ、テーブルの上にコールドパンチが用意されている祝日には、子供たちはみんな、誰しも勝手にペチャクチャ喋り出し、そのことを彼はいつもはあまりにひどいことだと思っていたのだが、今日のようにみんなが、不自然なほど厳肅になると、彼はなにか物寂しく感じるのだった。

しかし彼らはみんな腰を下ろして、このクリスマスがこの古い故郷での最後のクリスマスになることを、それぞれ思い描いていた。そこには、どんな大きな笑い声も起こる気配すらなかった。(第一部 完)。